

令和元年度 年報



大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目次

1	ごあいさつ _____	1
2	ワッハ上方に望むこと 寄稿 林 千代 (大阪府立上方演芸資料館運営懇話会殿堂入り部会委員、シナリオライター) ____	2
3	上方演芸資料館運営状況 (令和元年度) _____	6
4	収蔵資料の紹介 隅田川千鳥の『巡業記念』について _____	11
	浪花節のニットー長時間レコード _____	15
5	展示資料の紹介、資料紹介 (資料整理の現場から) _____	20
6	上方演芸資料館 (ワッハ上方) の経緯等 _____	43



表紙の写真 人生幸朗のメガネ

ぼやき漫才の人生幸朗 (じんせいこうろう、1907～1982年) の眼鏡。遺族の方からの寄贈で、舞台用の眼鏡といわれている。厚みのあるレンズを支えるフレームはしっかりしており、正面からみると存在感があるがシンプルなデザイン。テンプルの内側の模様遊びがある。

人生幸朗・生恵幸子は第11回上方演芸の殿堂入り名人に選ばれている。「責任者出てこいッ！」の決めゼリフや、「まあ皆さん聞いてください」など、幸朗独特のぼやきの話術と、幸子のおなじみのツッコミは、絶妙に絡み合い、コンビならではの笑いを生み出した。

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）では、平成8年度から、上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる演芸人を、「上方演芸の殿堂入り」名人として選考し表彰しており、23回目を迎えた令和元年度までに、58組94名の方々が殿堂入りされています。

こうした方々にまつわる当館所蔵の資料などをもとに、殿堂入り名人の足跡をたどり、上方演芸の魅力や歴史をご紹介する、連続企画「ワッハ上方殿堂入り名人 特別展」を、令和2年度から継続して実施していくことといたしました。多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

前期年報でもお伝えしておりますが、当館は、昨年平成31年4月、新たに資料等の展示や体験型の事業を通じ、府民に上方演芸に親しむ場を提供するとともに、府民をはじめ国内外の観光客にも上方演芸の価値や魅力を発信できるよう、リニューアルオープンいたしました。

大阪弁の解説とそれにまつわる収蔵資料等や演芸に関する歴史年表などを展示する「常設展示エリア」や、デジタル技術を駆使し上方演芸の魅力を体感いただける「体験エリア」のほか、上方演芸の新たな一面に触れ、お楽しみいただけるよう、機を捉えた企画展示を行う「企画展示エリア」を設けました。また、在阪放送局のご協力のもと、過去の上方演芸に関するテレビ・ラジオ放送を視聴いただけるブースも、引き続き設置しております。

リニューアル初年度となる令和元年度は、府民のみならず国内外から多くの方々にご入館いただいておりますが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、残念ながら本年2月29日から臨時休館を余儀なくされました。休館期間は、2か月余りに及び、ようやく5月19日から開館を再開いたしました。以前のよう賑わいを取り戻すには時間を要する状況にあります。再び、多くの方々に当館の魅力を存分にお楽しみいただけるよう、一日も早くコロナ禍が収束に向かうことを願うばかりです。

当館では、今後とも、収蔵資料を活用した取組み等を通じ、上方演芸の価値や魅力を広くお伝えし、その保存と振興に努めてまいりますので、皆様には引き続きのご支援をお願いいたします。

結びに、本年報を通じて、令和元年度における当館の取組みについての理解を深めていただければ、幸いです。

令和2年11月

館長 道上正俊

ワッハ上方に望むこと

林 千代
(殿堂入り部会委員)
(シナリオライター)

平成20年4月、「ワッハ上方」に存亡の危機が訪れた。

突如、橋下知事直轄のプロジェクトチームが大規模な歳出削減を求める「財政再建プログラム試案」を発表したのだ。

大阪府しかできない文化や歴史、教育施設などに関して、利益を重視しての評価で統廃合、売却を打ち出した。

上方演芸資料館・ワッハ上方も千日前からの移転とホール縮小、小演芸場など廃止と発表された。

大阪府文化施設を利益が上がるかどうか収支基準だけの評価に、反対の声が上がった。

ワッハ上方は、府が上方演芸に関する資料等の収集、保存、展示等を行うということで始まった事業である。四代目伊東雄三館長の元、『上方演芸発祥の地・大阪ミナミ千日前』での存続を願い、知事宛に上申書を提出した。

日本でただ一つの笑いの演芸資料館であり多くの人々が訪れ親しまれるワッハ上方でもあり、その存続を強く訴えた。

当時、私はワッハ上方の参与をしていて、その縁で世話人として「ワッハ上方を応援する会」を設立。『要りませ！ ワッハ上方』の署名運動をスタートさせて、難波高島屋前で芸人さんたちも参加しての街頭署名活動を行った。

2週間で2万名(最終的には6万名余り)の署名が集まった。

テレビのニュースや新聞記事でこの模様が取り上げられると、大阪だけでなく日本各地から賛同の声が上がり、ワッハ上方を訪れた、また、今後訪れたいという人たちから、更には、嘗て演芸ホールを利用した芸人さん、演劇人、文化人の方々からも署名や応援メッセージが届いた。

その署名を橋下知事に提出するため、藤本義一さん、南河内万歳一座座長・内藤裕敬さん、館長・伊東雄三さんたちと府庁に向かった。

「上方演芸の拠点が失われようとしている。大阪文化が次の世代へ伝達されるためにも存続を願う」と、直木賞作家の難波利三さんや漫才師の喜味こいしさんらの要望書も添えて提出した。

結果、現・千日前に留まるものの規模が縮小されるという事態で終息した。

関係者にとっては不本意な事態の收拾だった。

「ワッハ上方」のオープン時のことが思い出された。

まさに文化のオール大阪だった。

政治経済、人間性からがめつい奴のレッテルを貼られ蔑視されることもあった関西にあって、大阪文化に熱い視線が注がれる久し振りの刻の到来であった。

マス・メディア、芸能プロダクション、演者を含めた関係者、演芸資料を寄贈してくれた、また今後してくれる人たちが皆が”よっしゃ”と応援の声を上げてくれたのだ。大阪人の根性の見せ所。

日頃、ライバルとして競争しているわけだが、それを一時休戦して結集したのが、まさにオール大阪。

こんなことは今までなかったことであり、これからも恐らくないと思われる、ぐらいの出来事だった。

東京ならばこんな発想は考えられもせず、また、成り立たないと思う。関西にあってのオール大阪、だ。

立川談志師匠がワッハ上方に見えた時、館内を見学した後、東京に演芸資料館がないのをひどく嘆かれ、羨ましがられた。

オール大阪に結集出来る大阪人気質に、感心されたのか。

オール大阪！

行政が文化の価値を判断することに反発し、結集してひとつになったのだが、しかし、何かときわどいバランスの上に立ってのものであったことは否めない。

歴代の館長さんがそのバランスを取り、見事な舵取りをされたのだ。

色んな企画展示や公演などを通じて大阪の演芸文化ここにあり、と発信。そのひとつひとつの実績はワッハ上方の宝と言える。

それを運営費云々、費用対効果の物差しだけで縮小していくのは、余りにも無謀と言えた。

振り返って見ればー

平成8(1996)年11月15日。

大阪ならではの笑い資料館、府立上方演芸資料館・ワッハ上方がオープンした。

それより遡ること平成2年、現上方演芸資料館の設立を目指して上方演芸保存振興検討委員会が設立され、オープンに向けて資料館の立地場所や大阪府立上方演芸資料館の正式な名称、愛称・ワッハ上方など、多くの決めごとが話し合われた。

設立に先立ってその主旨が新聞に掲載される。

「上方演芸の保存および振興を図るとともに府民に上方演芸を楽しむ場を提供し、大阪文化の発展に資する」ことを目的とし「大阪文化の再発見と情報発信を進める上での拠点施設」を目指すとの理念を記載し、演芸に関する展示資料の無償提供を訴えたのだ。

設立前であったが、府民だけでなく全国の演芸ファンから手元に保管していた演芸資料(台本、舞台衣装、写真、パンフレット、小道具・・・等々)が府庁宛てに届けられた。保管場所を設け、送られた人に対して資料預かり証とお礼を書くだけでも大変な作業だったと聞いた。某会社を定年退職した、演芸一般についてとても詳しく演芸好きのTさんが事に当たって下さった。送られてきた人の住所・氏名、日付、送られてきた資料を明記。封筒や紐などもそのままの形で保管された。パソコンが普及していない時代だったので、そのご苦労は大変だったと推察される。こういう人たちの地道な努力を忘れてはならない。

公的施設だからこそ万全の保管体制を信じ提供していただいていることに関係者は責任と感謝

を念じ、日本でたった一つのお笑い資料館に向けての準備を着々と進めていった。

そして迎えた資料館の初代館長は狛林利男さん。

朝日放送の主に漫才・落語などの演芸番組の企画・プロデューサーを長く務め、特に演芸に関しては右に出る者のいない博識家、上方演芸研究家としても名を馳せた方。

落語家・漫才師などからも慕われ頼られ、誰もが認める初代館長にまことに相応しい人選だった。

ワッハ館内の機能は時代と共に推移、不本意ながら縮小されていくが、変わらないのはその内容。

寄贈される資料は令和2年の今日も、数は少なくなっはいるものの送られてくる。令和2年時点で約7万点。

随時内容を変えながら展示されている。それが呼び物のひとつなら、戦前のSP漫才レコードから天才漫才師と言われたエンタツ・アチャコ、ワカナ・一郎といったコンビのネタを訊くライブラリーも目玉コーナーと言えた。

何より在阪放送局からの協力があり、各局のお笑い番組が無償提供され、これも視聴出来る。

さすがに笑いの発祥・大阪にあつてのワッハ上方たる由縁、その協力体制は現在も続いている。

歴代の参与の方々が番組の内容を精査、漫才や創作落語などに禁止用語や差別用語など視聴していて不快な思いを抱かないようにチェック、その上でライブラリーでの視聴可能とされた。

ワッハ上方が開館してまもなくの時。

吉本興業、松竹芸能、米朝事務所、大宝企画、ケーエープロの5社が、ワッハ上方の5階にあるキャパシティー300名強のホールにて、一週間交替の当番制で自社の芸人さんの実演をする事になった。また、フリーの芸人さんも参加させた。

講談師や曲芸、物真似、奇術などの色物も登場させた。

1日90分の1公演。多くの演芸人が、経験を積む場所として実施されていたが、毎日公演を実施することが難しくなり、このプログラムは取り止められた。

二代目・館長は井上宏さん。関西大学の名誉教授であり、専門はメディア社会学。笑いに関する多くの著作がある、笑い学研究者でもある。

三代目・館長の有川寛さんは読売テレビで多くの演芸番組を企画・制作された。

「お笑いネットワーク」は新作漫才、「平成紅梅亭」は落語。

「紅梅亭」は昭和の初め、法善寺にあった上方落語黄金時代を作り上げた寄席小屋。興味ある方は、ライブラリーで是非視聴されたい。

有川館長の時。ワッハ上方入場者数の最高を記録した、【上方芸能まつり】だった。漫才・落語などの演芸だけでなく、上方舞や狂言、雅楽、能なども公演した。

当日の呼び物として「新人漫才コンクール決勝戦」が行われた。近隣の商店街も巻き込んで多くの人が集まり界隈はとて賑わった。初代館長から四代館長(以後は大阪府直営)までの頑張り、「笑いの文化」を次世代の子どもたちへ伝達する目的をも踏まえて、面白いプログラム作りにも受け継がれている。

問題は集客。「ワッハ上方祭り」などは今も出来るのではないだろうか。

リニューアル後にはがっかりしたことがある。書物、本の類が開架されていないことだ。開館当

時に並べられていたあの多くの演芸関係書物や喜劇・漫才台本はどこへ行ったのか。

大阪府立上方演芸資料館とあるだけに、資料の展示・閲覧は欠かせないはず。

収蔵庫に眠らせるだけは、何としてももったいない。

1枚のチラシ、思い出を籠めた舞台衣装、演者が愛用した小道具などからその時代と演芸が浮き上がって来る。

過去を知り、未来につなぐワクワクするような資料館であって欲しい。

演芸のことなら、ワッハに行けば何でも分かる、という拠点であって欲しい。

上方演芸資料館運営状況（令和元年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数・視聴ブースリクエスト件数〔月別推移〕

	入館者数	開館日数	1日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数（月計）
4月※1	1,117人	7日	160人	150件
5月	3,070人	27日	114人	451件
6月	3,342人	27日	124人	473件
7月	3,199人	26日	123人	473件
8月	4,751人	26日	183人	573件
9月	3,655人	25日	146人	533件
10月	3,372人	27日	125人	458件
11月	3,639人	27日	135人	484件
12月	2,724人	24日	114人	403件
1月	2,973人	24日	124人	402件
2月	2,699人	24日	112人	457件
3月	※2 0人	※2 0日	—	—
合計	34,541人	264日	131人	4,857件

※1 4月24日（リニューアルオープン）～4月30日までのデータ

※2 新型コロナウイルス感染症拡大防止により令和2年2月29日から臨時休館（5月19日より開館再開）

〔休館日〕毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は、翌平日が休館日）及び年末年始

〔過去3か年（平成28～30年度）〕

	入館者数	開館日数	1日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数
H28	14,888人	255日	58人	8,122件
H29	14,096人	255日	55人	7,096件
H30	※3 7,567人	※3 171日	44人	4,623件

※3 平成30年4月1日～11月30日までのデータ

（施設改修工事のため、平成30年12月1日～平成31年4月23日まで休館）

〔休館日〕毎週水、木曜日 及び 年末年始

■ 上方演芸資料館運営懇話会 開催実績

1回開催 (令和2年2月20日)

■ 運営懇話会各部会 開催実績

・ 殿堂入り部会

2回開催 (令和元年12月20日、令和2年1月30日)

・ 資料整理・活用部会(前身の「展示事業及び資料整理に係る有識者会議」を含む)

13回開催(概ね月に1回程度開催)

・ 企画部会

1回開催 (令和元年11月5日)

・ 放送資料部会

1回開催 (令和2年3月27日)

■ 研修会実施報告

資料整理・活用部会(展示事業及び資料整理に係る有識者会議)出席者で研修会を実施。

各回、テーマに沿って、講義を受けた。

<実績>

開催日	部会等	研修内容	講師
5月28日	有識者会議	近世における上方演芸の歴史等について	荻田清氏
6月11日	有識者会議	大阪俄の起源から現状までについて	荻田清氏
7月9日	有識者会議	主なレコード資料の特徴、長所、短所、留意点を解説	大西秀紀氏
8月20日	有識者会議	東西の演芸の見立番付の変遷とおもしろさを解説	荻田清氏
10月8日	第2回部会	資料整理の実務における手順、課題及び発見等について	荻田部会長
11月12日	第3回部会	五代目笑福亭松鶴の「天王寺詣り」の試聴・解説	大西委員
12月10日	第4回部会	「大阪講談の歴史」概説	荻田部会長
1月24日	第5回部会	オリエントSP 二代目桂三木助「丁稚芝居」の試聴・解説	大西委員
2月12日	第6回部会	東京の博物館2館の運営状況について紹介・解説	荻田部会長
3月17日	第7回部会	浪曲の成立から現代に至るまでの歴史について	荻田部会長

■ 館外展示 開催実績

○目的：上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たされた「上方演芸の殿堂入り」名人（平成28年度から30年度）にちなんだ貴重な資料を展示し、府民に上方演芸に親しんでもらう機会を提供するとともに、ワッハ上方のPRを図った。

○場所：府内1ヶ所（大阪市内〔梅田〕）

場 所	開催時期等	会場風景
<p>大阪工業大学 梅田キャンパス 「OIT 梅田7-」 *1階ギャラリー (大阪市北区)</p>	<p>【開催期間】 1月17日(金)～30日(木) [14日間]</p> <p>【見学者数】 19,152人</p> <p>【タイトル】 ～上方演芸の殿堂入り～</p> <p>【展示資料】 上方演芸の殿堂入り名人の手ぬぐい、レコードのほか、高座セットなど</p>	   

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人さんがあまたおられます。

上方演芸資料館では、平成8年度から、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛し親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」名人を決定しています。平成30年度（第22回）までに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど56組90名の方々が受章されてきました。

第23回目となる令和元年度は、「二代目 笑福亭松之助」と「Wヤング」が受章され、表彰式は新型コロナウイルスの感染拡大の影響により実施が遅れましたが、令和2年9月14日に上方演芸資料館で開催しました。



二代目 笑福亭松之助



Wヤング

(画) イラストレーター成瀬國晴氏

「上方演芸の殿堂入り」名人一覧表

第 1 回（平成 8 年度）	初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸
第 2 回（平成 9 年度）	ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・中田ラケット、花月亭九里丸
第 3 回（平成 10 年度）	六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童
第 4 回（平成 11 年度）	二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若
第 5 回（平成 12 年度）	四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児
第 6 回（平成 13 年度）	二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、富士月子
第 7 回（平成 14 年度）	橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子
第 8 回（平成 15 年度）	都家文雄・都家静代、林家とみ
第 9 回（平成 16 年度）	夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし
第 10 回（平成 17 年度）	三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・海原小浜、宮川左近ショー
第 11 回（平成 18 年度）	ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵
第 12 回（平成 19 年度）	ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助
第 13 回（平成 20 年度）	横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ
第 14 回（平成 22 年度）	三代目桂米朝
第 15 回（平成 23 年度）	二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・若井けんじ
第 16 回（平成 24 年度）	上方柳次・上方柳太、岡八朗（コメディアン）
第 17 回（平成 25 年度）	川上のぼる、木川かえる
第 18 回（平成 26 年度）	二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ
第 19 回（平成 27 年度）	秋田Aスケ・秋田Bスケ、花紀京（コメディアン）
第 20 回（平成 28 年度）	三代目桂春団治、二代目春野百合子
第 21 回（平成 29 年度）	かしまし娘
第 22 回（平成 30 年度）	レッツゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子
第 23 回（令和元年度）	二代目笑福亭松之助、Wヤング

※ 平成 8 年度～令和元年度／58 組 94 名

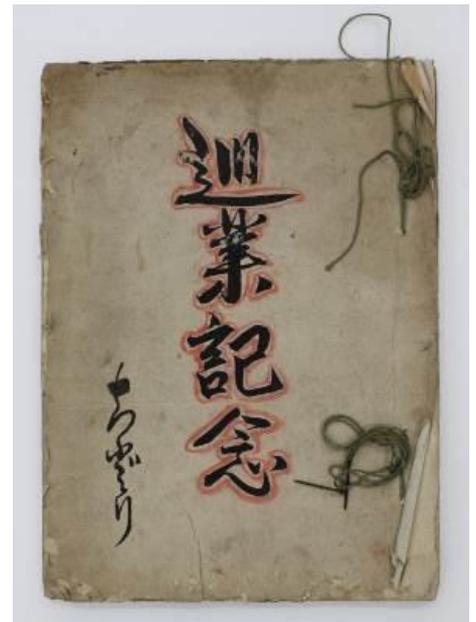
収蔵資料の紹介

隅田川千鳥の『巡業記念』について

荻田 清
(資料整理・活用部会長)
(梅花女子大学名誉教授)

漫才師が戦前の中国大陸を巡業した記録が残されている。記録を残したのは隅田川千鳥。そのご子息で、浪曲ギター伴奏で名をなした近江吾朗（本名：北村芳彦、昭和9年生～平成12年没）氏より寄贈されたもの。近江氏は隅田川千鳥と中村種代を両親に持ち、漫才師から浪曲のギター伴奏に移り、先代京山幸枝若の「浪曲河内音頭「雷電と八角」」などの伴奏者として知られる(『上方芸能』88号、特集浪曲がここにある<付現代関西浪曲名鑑>)。

隅田川千鳥は、花月亭九里丸『笑根系図』によれば、明治40年生、二代目三遊亭円若の弟子で、兄弟弟子に都家文雄・都家静代がいる。中村種代は、砂川捨丸と一時コンビを組んでいた中村種春の弟子。兄弟弟子(姉妹弟子)に最後まで捨丸の相方だった中村春代がいた。時代はずっと後になるが、当館に昭和26年6月下旬席(注)戎橋松竹の番組があり、そこに「④漫才 中村種代・隅田川千鳥」(図版参照。整理番号00437384)と出てくる。



図版1 『巡業記念』表紙



図版2 戎橋松竹 番組プログラム (協力：松竹株式会社)

その千鳥が昭和8年暮れに出発し、9年元旦に奉天の興行に出演している。その記念のために巡業先の劇場名、興行主等を残そうと、印を捺してもらい、日付などを書き記した冊子である(整理番号00272146)。一座の座組や芸の内容が詳しく記録されていないが、「ナンセンスレビュー」の語が示唆を与える。小原萬龍・中村種春一行の「大入袋」が貼られているのも参考になるだろう。小原萬龍は安来節のレコードを残している二代目萬龍かと思われ、この一座は歌や踊りを交えた賑やかな一座だったようである。

この資料の価値は、昭和初期の（順調に成功した）巡業の実態が垣間見えることである。一日、二日で移動し、その先々の興行師に世話になり、効率的に巡業が組まれている。時節柄、「慰問」という名分があったからであろう。これらの興行について、現在では新聞資料の調査が進んでおり明らかになるかもしれないが、そこまでの調査はできていない。ご教示を期待したい。

この資料で、ちょっと注目されるのは、芸能から離れるが、駅のスタンプを丁寧に収集していることである。大陸の駅のスタンプなどは現在では、あるいはかけがえのない資料ではなかろうか。

以下、資料の書誌（本の大きさ、形など）を簡単に述べる。大きさは縦27.8センチ×横20.4センチ。下の表の49の次の空白までは袋綴じ（半紙を二つ折り）。50から後ろは半紙（縦24.3センチ×横16.6センチ）が6枚挟まれている。

表ではスタンプは（印）とし、その色は黒・青・紅・紫とまちまちであるが、色に意味はないとみて区別しなかった。印の文字は可能な限り読み切ったが、なお解読できなかった部分は■で記した。26と27の1頁空白というのは白紙の袋綴じが切れているため。

なお、隅田川千鳥の調査には高草学芸員の協力を得た。

（注）この番組には大阪ことばの会編『大阪弁』第六集の広告が大きく載っている。『大阪弁』第五集（昭和25年刊行）から一年を経て、ようやく第六号が昭和26年8月に刊行される。この「お笑い出番表」番組には「21日より30日まで」とあり、また「七月一日よりお知らせ」の予告が載っていることから、昭和26年6月下席の番組表と推定した。この当時、戎橋松竹は漫才と東京落語のみで番組が組まれていたことがはっきりわかる、貴重な番組表ともいえよう。



図版3 『巡業記念』昭和8年の暮れから元旦



図版4 『巡業記念』昭和9年1月

巡業記念 ちどり

	年月日	劇場名・興行部〔肉筆〕	劇場住所・電話、興行部・住所・電話	興行部・興行者	備考	駅のスタンプ
1	昭和八年拾二月一日 五日間	花月	西宮市與古道町			
2	〔なし〕	小栗座	和泉町伯太			
3	〔なし〕	寿座	南海線大津町木ノ町			
4	〔なし〕	金華劇場	岐阜			
5	〔なし〕	市岡倶楽部	大阪市湊区八雲町			
6	昭和八年十一月一日より十日間	千代田館	大阪市北区天神橋六丁目		万才とナンセン スレヴュー	
7	昭和八年十一月十日より四日間	遊楽座	和歌山市築地			
8	昭和八年十一月十四日	新橋座	東成区今里新地			
9	昭和九年戌年元旦	奉天 演藝館 身上興行部	(印)奉天住吉町 演芸館 電話 旅館部四三三三 演芸館三三〇五 身上興行部	(印)満州国大札奉祝 昭和九年 三月一日	壹銭五厘の印紙	奉天駅 昭和9.3.5
10	昭和甲戌正月八九日	撫順公会堂	(印)撫順 公会堂 電話武貳壹番	(印)満州撫順 蜂谷慰安部 電話二二一一番		
11	昭和九年 一月十日より一日間	蘇家屯 建国館				
12	昭和九年一月十一日一日間	海城 公会堂				
13	昭和九年一月十二日ヨリ二日間	大石橋 公会堂	竹本興行部			
14	昭和九年一月十四日より七日間	大連劇場	劇場主 柴崎時三	(印)大連市若狭町 大連劇場 電話三九三八	(印)大連劇場の印三種	
15	昭和九年一月廿一日ヨリ 二日間	旅順映画館		(大入袋) ちどり様 旅順映画館 電話一七五番		
16	〔なし〕	上海 東和館	乍浦路三百四十一号 館主 池村昭信	(ボ子袋) ちどり様 電気館 三浦興行部		
17	昭和九年壹月卅一日 (1頁空白)	謝御慰問	支那上海々軍特別陸戦隊 演芸部 緒形信義	(印)軍事郵便	(印)上海海軍特別陸戦隊	
18	昭和九年二月六日ヨリ五日間	三浦興行部 電気館	青島市場三路	(ボ子袋) ちどり様 電気館 三浦興行部		
19	昭和九年二月十三日より六日間 再度興行	大連 大連劇場	劇場主 柴崎時三	(印)大連市若狭町 大連劇場 電話三九三八	(印)大連劇場の印三種	
20	自二月二十日 至二月二十三日	出演記念 長春座 大入	長春座企画部 新京吉野町三丁目	(印)佐野 (印)株式会社社長 春座 (印)長春座	(印)近日上映 松竹オール・トーキー 東洋の母 蒲田・加茂 松竹少女歌劇総動員 新京唯一の映画殿堂 長春座	
21	(大入袋) ちどり様 二月二十日	松竹共営 長春座				
22	昭和九年二月 自二十四日 至二十五日	四平街劇場	宝泉街一ノ五八 池田興行部 老松峯月	(印)四平街 四平街劇場 平康里		
23	昭和九年二月二十六日	開原公会堂	東洋街 有吉興行部	(印)開原 有吉興行部 第三区 (印)開原於公会堂	(印)有吉 原 9・2・26開興行部	
24	昭和九年二月廿七日	出演記念 鉄嶺 公会堂	松田興行部	(印)鉄嶺演藝部 9・2・27 松田興行部		(印)鉄嶺駅 9・2・28
25	二月二十八日より五日間	奉天 演藝館 身上興行部	(印)奉天住吉町 演芸館 電話 旅館部四三三三 演芸館三三〇五 身上興行部	(印)満州国大札奉祝 昭和九年 三月一日	(大入袋) 演芸館 初日 電話三三〇五/壹銭五厘の印紙	(印)奉天駅 昭和9.3.5
26	昭和九年三月五日より二日間 (1頁空白)	娯楽映画と演劇 殿堂 演ゲイ館	西野興行部 南満州鞍山赤城町 電話二七〇番 五七九番	(印)演芸館 9・3・5 西野興行部	(印)演芸館	
27	〔なし〕	千里の道も一歩より 撫順公会堂	(印)満州国撫順公会堂 蜂谷慰安部 電話二二一一番	(印)撫順 公会堂 電話武貳壹番 (印)蜂谷慰安部		(印)撫順駅 昭和9・3・9
28	昭和九年三月九日	何千萬は一より	(印)本溪湖 森本興行部			(印)本溪湖 昭和9・3・9
29	昭和九年三月十日より二日間公開	朝鮮と満州の境を流れたる大河にも増す君の芸道	安東南地座 宣伝部 新井孝道応書	(印)鴨綠江橋側税関出張所 (印)南地座印 (印)花房	(印)花	
30	昭和九年三月十二日 十三日	新義州 新劇場	阪西興行部 (印)阪西之印	(印)新劇場 9・3・12 電話一五一番 阪西		(印)新義州駅 昭和9.3.14
31	昭和九年三月十五日ヨリ 日間	京城 京城演芸館 盆興行部	(印)京城演芸館	(大入袋)(印)京城門内興行部		(印)京城 9.3.22
32	昭和九年三月二十三日ヨリ三日間	仁川 歌舞伎座	仁川府浜町五	(印)仁川 歌舞伎座		(印)仁川駅 9・3・26
33	昭和九年三月廿六日 より二日間	誠如神	京城府龍山■■■■ 拾吉番地 新玉興行部 龍山劇場	(印)新玉興行部 9・3・27 龍山劇場		
34	昭和九年三月廿八 九 二日間	裡里劇場	湖南■■裡里 座主加藤久吉	(印)裡里座		(印)裡里駅 9・3・30
35	昭和九年三月三十日 三十一日 両日	警心館	京釜線大田	(印)福田興行部 警心館 朝鮮忠南大田大興町 電六五一 30日		(印)大田駅 儒城温泉城 9.4.1

36	昭和九年四月一日 六日間	(印)太平館 釜山府幸町一丁目 吉田興行部 電話二二一八番 営業担任 新高不二人		(印)釜山府幸町 大平館劇場 吉田興行部		
37	昭和九年四月七日 凧	釜山一博多間 連絡船 北九州商船会社 珠丸		(印)珠丸船長印		(印)北九州商船 9・4・7 珠丸
38	昭和九年四月八日初日	大入 川文座	福岡市東中洲	(印)川文興行部 代表者長尾長太夫 (印)博多 川文座	(大入袋) 小原萬龍・中村種春一行 初日 川文座	(印)博多駅 9・4・16
39	昭和九年四月拾六日 三日間限り	恵比須座	クルメ市	(印)久留米市・赤司興行部・恵比須座	(印)赤司興行部之印 (印)恵比須座 電話一九八八番 電話六五七番	(印)久留米駅 9・4・18
40	昭和九年四月十九日より	長崎 寿みなみ座	電話四六一番 事務所 香月	(印)「南」の周りの字読めず (印)国際産業観光場 長崎と雲仙 昭和九年三月二五日		(印)長崎駅 9・4・24
41	昭和九年四月廿四日より四日間	文芸座	(印)佐世保文芸座 座主丸太英智 電話一五五四番 文芸座主之印	(印)ぶんげいざ興行部 (印)佐世保 9・4・24 文芸座		(印)佐世保駅 9・4・30
42	昭和九年四月廿七日より二日間	崎戸炭坑 福浦座	(印)長崎県 福浦座 崎戸			(印)早岐駅 9・4・30
43	昭和九歳四月卅日初日 二日■	佐賀市 佐賀劇場 電九六五番	(印)佐賀市材木町 佐賀劇場 電話九六五 昭和 9・4・30	(印)佐劇 (印)佐賀劇場営業部之印		(印)佐賀駅 9・5・1
44	昭和九年五月二日	大牟田市 旭座	(印)城島劇場 旭座 筑後城島 大牟田市 電二二三九 柳河下宮永平野興行部			(印)大牟田駅 9・5・5
45	昭和九年五月五日初日 二日間	熊本市 旭座	(印)反後徳太郎 旭座 熊本市新市街 電話六四〇番			(印)熊本駅 9・5・7
46	昭和九年五月七日 六日間開演	微笑 苦 咲 爆	鹿児島中座 花房芳夫	(印)鹿児島市 鴨池劇場 花房		(印)鹿児島駅 9・5・18
47	(昭和九年五月十日)	謝慰問	(印)鹿児島衛成病院 (印)鹿児島衛成病院 受付 9・5・10			(印)鹿児島駅 9・5・10
48	昭和九年五月十三日 三日間	武の国 薩洲川内 太平座	堀田健太郎 (印)堀田	(印)太平座 (印)堀田健太郎		(印)川内駅 9・5・15
49	1934、五月十六日 興行三日間	若鮎の香り 不知火の海 八代 寿劇場	松島興行部	(印)寿劇場 松島興行部 電話二〇七番		(印)八代駅 9・5・19
	(1頁空白)					
	(1頁空白)					
50	昭和九年六月五日	筑豊座	飯塚市 吾妻家 (印)吾妻家/筑豊劇場/ 9・6・7/福岡県飯塚/電話五五番	(印)飯塚 吾妻家 座主	吾妻家 筑豊劇場 9・6・7 福岡県飯塚 電話五五番	
51	昭和九年六月拾日	漆生劇場	福岡県嘉穂 稲築漆生 山内興行部	(印)福岡県嘉穂郡 9・6・10 漆生劇場 岩永興行部 電一〇番		
52	昭和九年五月式拾五日より三日間	御宮座	(印)宮田 御宮座 特別大興行	(印)鞍手郡宮田町 御宮座 塚崎営業部 電話十八番 塚崎繁雄		
53	() 五月式拾八日より四日間	えびす座	久留米市			
54	昭和九年五月二十二日初日 三日間	八幡 旭座	(印)八幡 旭座			
55	(昭和9年6月1日)	(鳥栖劇場)	(印)佐賀県鳥栖町 9・6・1 鳥栖劇場 興行部 電話六二番	(印)鳥栖劇場 轟興行部 佐賀県鳥栖町 電話六二番	we are charmed your fine play At Gaser Play House	(印)鳥栖駅 9・6・3
56	() 六月三日より二日間	(旭) 東座	福岡県大川町榎津 座主中田裁資	(印)福岡県旭東座 榎津		
57	() 十九 二十 廿一	大入紀念 日若座	(印)筑前 直方市 電話百三十一番	(印)日若座 安元印		
58	昭和九年六月拾五日	山嘉座	福岡 嘉穂 稲築鴨生 山内興行部	(印)山嘉座 大勘定		
59	(昭和九年六月十三日)	門司 稲荷座	(印)小倉繁 興行部門司市日之出町(稲荷座) 電九九八番 自宅 門司市内本町四 電一二三番	(印)門司稲荷座 9・6・13 小倉興行部		(印)門司 稲荷座 電話九九八番

収蔵資料の紹介

浪花節のニットー長時間レコード

大西 秀紀

(資料整理・活用部会委員)

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員)

大阪府立上方演芸資料館は、演芸物を中心に1万枚を超えるSPレコードを所蔵するが、その中にニットー長時間という変わり種のレコードがある。今回はその1枚をご紹介したい。

「浪花節 小三徳兵衛」 末広亭小辰丸 ニットー長時間レコード L78 (昭和3 (1928)年1月新譜 資料コード 00627281) [図1]



図1 「小三徳兵衛」ニットー長時間 L78

ニットー長時間レコード

ニットー長時間レコードの見た目は、普通の12インチ(約30センチ)のSPレコードである。しかし一般的な12インチ盤が片面4分30秒前後の録音時間であるのに対し、こちらは線速度一定の考えに基づく特殊な録音方式により、片面10分前後の演奏が録音されている。線速度一定の長時間レコードでは、当時英国のワールドレコード(邦名ウオールドレコード)が先行していたが、ニットー長時間レコードは基本的には同じ考えに立ちながら、速度調節器の連動方式等に独自のアイデアが多数盛り込まれた、国産技術による画期的なレコードだった。ただ再生に専用の蓄音機(あるいはアタッチメント)が必要なことや、世に出たのが旧吹き込み(アコースティック録音)から電気吹き込み(マイクロホン録音)へ録音方式がまさに切り替わろうとする頃で、旧吹き込みだった長時間レコードがその後の電気吹き込みに対応できなかったことなどから、結果的にあまり普

及しなかった。ニットー長時間レコードの新譜は大正 15(1926)年 11 月から昭和 3 (1928)年 1 月にかけて 77 枚が発売された。本稿でご紹介する「小三徳兵衛」は、最後に発売された 5 枚の内の 1 枚である（なお参考として、ニットー長時間の演芸レコードのリストを稿末に挙げた）。

一般のレコード（SP・LP・EP）は角速度一定（線速度不定）の考えに基づいて作られている。これはレコードを毎分一定の回転数で回転させ、音溝をレコード針でなぞる（トレースする）ことにより再生するものである。この方法では外周・内周の音溝の長短にかかわらず、針先は常に同じ角速度で音溝を通過する。したがって演奏の時間が同じでも、盤面上の位置によって記録される音溝の長さは常に変化している。12 インチ盤を 78 回転/分で再生した場合、音溝を通過する針先の速度（線速度）は約 72~23 メートル/分ぐらいの間で変化する。内外周の線速度の違いは当然再生音にも反映され、一般的に外周に近いほど音が良く、内周に進むにつれ次第に悪くなるとされている。

ここでもし内周の線速度で十分な再生音が確保されるのならば、その線速度で盤全体に録音すれば通常の数倍の長さの録音が可能となる。これが線速度一定の考え方である。これを実現するには、外周ではゆっくり、内周では速く盤を回転させる必要がある。ニットー長時間レコードの再生には従来型の蓄音器をベースとし、速度調節器（アタッチメント）を盤上に乗せて使用した〔図 2〕。また、後に速度調節機構が内蔵された機種も発売された。



図 2 速度調節器

「小三徳兵衛」の録音時間は表面が 9 分、裏面が 9 分 30 秒で、これはそれぞれが一般的な 10 インチの SP レコード 3 面（1 枚半）分に相当する。つまりレコード盤の載せ替えや針の上げ下ろし等の煩わしい操作が、3 回のところを 1 回で済ますことが出来る。これは聴く側のメリットだが、演じる側も演奏を 3 分ごとに区切られることなく、3 面分を通して演奏できるメリットはとても大きいよう感じられる。

ニットー長時間レコードは、基本的に毎分 80 フィート（2438.4 センチ）の線速度で録音されているため、再生の回転数は音溝の最外周で約 26 回転/分、最内周で約 55 回転/分となり、その間を連続的に変化させる必要がある。本稿を書くにあたり、この「小三徳兵衛」を再生したが、LP レコードの回転数（33.33 回転/分）で再生した音声データに、コンピュータソフト上でデジタル補正を施すという方法を使った。

末広亭小辰丸

末広亭小辰丸〔図3〕は二代目小辰丸の弟子で、自身は三代目になる。また初代末広亭清風から見て曾孫弟子にあたる。

小辰丸は比較的多くのレコードを残した。設立間もない名古屋のツルレコードから、大正14(1925)年9月新譜として発売された「樋口重三郎」が最初のレコードと考えられる。その後、小辰丸のレコードはツルから1~2ヶ月に1種類(1枚物あるいは2枚物)のペースで発売され、昭和に入るとツル以外にも、オリエント、ニッポー、ヒコーキ、内外などから発売された。本稿の「小三徳兵衛」は、ニッポーでは「伊達家大評定 御殿床下 2599」「弥作の鎌腹 2628-9」に続く三作目である。

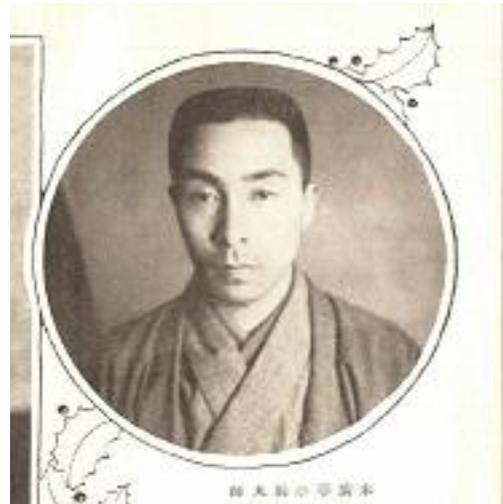


図3 末広亭小辰丸

昭和3(1928)年に入ると小辰丸のレコードはほぼ毎月発売され、ときには同月に2~3社

(「ニッポータイムス」昭和2年12月号より)

から出ることもあり、レコードでの人気は確実なものになってきたように見受けられる。そしてオリエントレコードの昭和4(1929)年4月新譜「吉田御殿(鹿子草紙)」は「小辰丸改メ三代目末広亭清風」〔図4〕となっているところから(同年3月新譜「勇の纏 野狐三次 4582-3」は小辰丸名義)、昭和4年に入ってから間もなく、清風という一門の開祖の名跡を三代目として襲名したようだ。これを境に、それまで関西系レーベルだけだったレコーディングが、関東系の大手レーベルであるイーグル(ニッポノホン)、コロムビア、ビクター、ポリドール等でも行われ、さらに加えて関西系のコッカ、タイヘイにも広がった。レコードデビューからわずか5年ほどで、ほとんどの主要レーベルを制覇し、昭和5~6年がレコード的には活躍のピークだったといえる。

しかし昭和7(1932)年7月に東京の太陽レコードから発売された「魚屋本多」のレーベルは「清風改メ末広亭小辰丸」となっている。三代目清風を名乗ることが期限付だったのか、あるいは何らかの故障が入り名跡を返上しなければならなかったのかは分からないが、小辰丸に戻ったのは事実である。そしてその後は新興のスタンダード・テイチクからそれぞれ4~5枚ずつの新譜が出るが、それ以外はトンボやニッポンなどの中堅レーベルからの新譜になる。そして、この年は22種あった新譜が翌8(1933)年には4種に減り(内2種はリーガルからの再発売)、管見では昭和11(1936)年10月にリーガルから発売された「江藤新平と名妓お鯉 67929-30」(コロムビア 26288-9の再発売)を最後にレコード界から姿を消したように見える。小辰丸-清風のレコードは、リーガルやオリムピアなどの再発売ものを含めて、現在126種約230枚のデータを確認している。

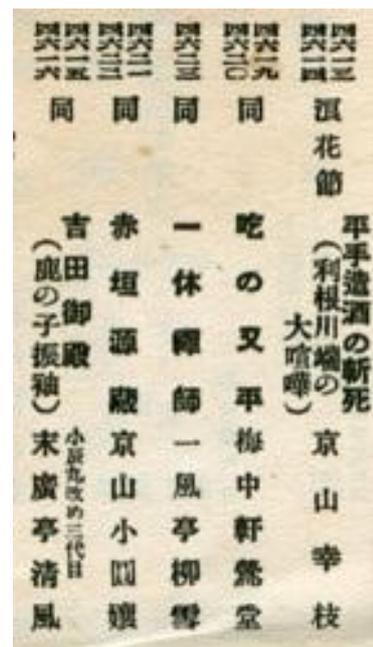


図4 「オリエントレコード5月新譜(4月既発売分)」(昭和4年)

浪花節「小三徳兵衛」

レコードのあらすじは次の通りである。

【レコード番号 L78-A】

初夏の夕暮れ時の隅田川、徳兵衛は両国橋の欄干にもたれながら、橋のたもとにある船宿みどりやの二階から流れる唄声に聴き惚れていた。徳兵衛は江州長浜在井ノ口村の農家の倅で、五年続いた飢饉で実家の田畑は人手に渡り、それを取り戻す金を稼ぐために、徳兵衛は江戸へ奉公に出た。そして七年の年季が明け、その間に貯めた五十両を手に郷里へ戻るところであった。

やがて唄声は止み、みどりやの裏口から芸者小三が出て来た。聞こえていた唄声の主は小三だったようだ。酔い醒ましをするつもりか、酔った足取りで徳兵衛の方へ近づいてくると、石につまずき転んでしまう。徳兵衛が起こそうとすると、小三は水が飲みたいという。仕方なく徳兵衛が船宿の勝手許から水を持って来ると、小三は差し出された徳兵衛の手首をしっかりと握りながら美味そうに水を飲み、笑顔で礼を言うとみどりやへ戻っていった。

小三の後ろ姿を眺めながら徳兵衛は、男と生まれたからには、あんな美女と遊んでみたいという思いに囚われていた。懐には七年の間、働き続けて貯めた五十両がある。しかしこれは故郷に残した親に渡さなければならない金で、手を着けるわけにはいかない。でも、全部使わずとも一時なら遊べるのではないか。散々迷った挙げ句、徳兵衛はみどりやの座敷に上がることを決意する。

【レコード番号 L78-B】

その日の夜更け、我に返った徳兵衛は、みどりや二階の廊下から眼下の隅田川を見つめていた。わずか一夜で五十両を使い切ってしまったのだ。もう国へ帰ることは出来ず、とって奉公に戻ることも出来ない。この上は死んで詫びるしかない、二階の手摺りに足を掛け、墨田の川に身を投げようとしたその時、後ろから小三に抱き留められる。死んで花実が咲くものかと小三は徳兵衛を説得するが、若旦那と偽っていた徳兵衛は身の上を明かすとともに、生きてはられないわけを話し、死なせて欲しいと小三に訴える。

小辰丸-清風はこのレコード以外に「小三徳兵衛」は録音していないようで、物語のこの後の展開は、この2面だけでは分からない。一方で曾我廼家五郎作の「小三徳兵衛吾妻草紙（以下、吾妻草紙）」という三幕からなる戯曲があり、その第一幕がこのレコードと似たような筋である。紙数も尽きたので両者の具体的な比較を記すことは出来ないが、吾妻草紙では船宿の主人が徳兵衛と旧知の仲であったり、徳兵衛は大阪市岡新田の出身で、三年間の奉公で稼いだ百両を懐に郷里へ戻るところであったりと、多くの違いが見受けられる。どうやら吾妻草紙が先行作のように思えるが、浪花節版の上演情報が未調査のため、浪花節が先行していた可能性も否定はできない。今後の課題としたい。

（この「小三徳兵衛」の音源は、当館ライブラリーにてお聴きいただけます。）

附・ニットー長時間の演芸レコード

〔落語〕

借家怪談	立花家花橘	レコード番号 L2	大正 15(1926)年 12 月
らくだ	桂春団治	レコード番号 L16	大正 15(1926)年 12 月

貧乏花見	桂春団治	レコード番号 L27	昭和 2 (1927) 年 1 月
忠義の正夢	立花家花橘	レコード番号 L28	昭和 2 (1927) 年 1 月
百年目	立花家花橘	レコード番号 L35	昭和 2 (1927) 年 3 月
ぬけ雀	立花家花橘	レコード番号 L42	昭和 2 (1927) 年 6 月
足あがり	桂春団治	レコード番号 L43	昭和 2 (1927) 年 6 月
宿屋の仇討	笑福亭枝鶴	レコード番号 L60	昭和 2 (1927) 年 9 月
辻占茶屋	立花家花橘	レコード番号 L61	昭和 2 (1927) 年 9 月
宿替	桂春団治	レコード番号 L63	昭和 2 (1927) 年 9 月
円陽伯	桂春団治	レコード番号 L74	昭和 2 (1927) 年 12 月
高津の富籤	笑福亭枝鶴	レコード番号 L82	昭和 3 (1928) 年 1 月

〔講談〕

曲垣平九郎 出世の春駒 大島伯鶴 レコード番号 L17-9 昭和 2 (1927) 年 1 月

〔浪花節〕

高田の馬場	桃中軒如雲	レコード番号 L7	昭和 2 (1927) 年 11 月
鳴渡る櫓の太鼓	東天晴	レコード番号 L20	昭和 2 (1927) 年 1 月
壺坂	東天晴	レコード番号 L21	大正 15 (1926) 年 12 月
引揚げの赤垣	一心亭辰雄	レコード番号 L29	昭和 2 (1927) 年 1 月
児玉将軍と都々逸	寿々木米若	レコード番号 L34	昭和 2 (1927) 年 6 月
忠僕直助	東天晴	レコード番号 L36	昭和 2 (1927) 年 3 月
村上喜剣の切腹	東天晴	レコード番号 L44	昭和 2 (1927) 年 6 月
久馬お葉献上	東天晴	レコード番号 L58	昭和 2 (1927) 年 9 月
小笠原騒動	寿々木米若	レコード番号 L59	昭和 2 (1927) 年 9 月
丸津田越前守	東天晴	レコード番号 L71	昭和 2 (1927) 年 12 月
勇の加賀鶯	寿々木米若	レコード番号 L72	昭和 2 (1927) 年 11 月
小三徳兵衛	末広亭小辰丸	レコード番号 L78	昭和 3 (1928) 年 1 月
五郎正宗 (継子虐め)	東天晴	レコード番号 L79	昭和 3 (1928) 年 1 月
大石東下り	桃中軒如雲	レコード番号 L80	昭和 3 (1928) 年 1 月

【参考資料】

- * 大西秀紀「長時間レコードの復元再生について」『復元幻の「長時間レコード」山城少掾 大正・昭和の文楽を聞く』CD 解説書、紀伊國屋書店、2006
- * 唯二郎『実録 浪曲史』東峰書房、1999、p. 402-403
- * 馬場美佳「二代目末広亭辰丸と新派浪花節—語られる「金色夜叉」」『浪花節の生成と展開—語り藝の動態史にむけて』せりか書房、2020、p. 75-93
- * 曾我の家五郎「小三徳兵衛吾妻草紙」『曾我の家五郎喜劇全集 第七編』大鏡社、1922、p. 73-133
- * 正岡容『定本日本浪曲史』岩波書店、2009、p. 95-96
- * 倉田喜弘編『演芸資料選書 4 演芸レコード発売目録』国立劇場、平成 2 (1990)
- * レコード各社発行の月報、総目録

展示資料の紹介

企画展示「芸人さんは多才だ!」展示資料のご紹介

大西 律子(上方演芸資料館学芸員)

(1)企画展示「芸人さんは多才だ!」について

大阪府立演芸資料館(愛称:ワッハ上方)は、「上方演芸の保存および振興を図るとともに、みなさまに上方演芸を親しむ場を提供し、大阪文化の発展に資する」という目的で、平成8(1996)年に設置された、全国で唯一の演芸資料館である。

平成30年度には、上方演芸のすばらしさを広く発信していくために魅力ある施設となることをめざして改修を行い、平成31(2019)年4月、リニューアルオープンした。

リニューアル後の当館には、展示スペースが2つ設置されている。それは、収蔵資料を活用し、上方演芸の歴史にふれていただける常設展示エリアと、これまでにない新たな視点から、上方演芸を紹介する企画展示エリアである。

そのうち今回は、企画展示エリア、とりわけ令和元年度下期の企画展示「芸人さんは多才だ!」の概要と、ほんの一部ではあるが、展示されている資料について紹介させていただきたいと思う。

まず、当館の企画展示を企画するにあたっては、次の3つの方針がある。

- ・収蔵資料を活用しながらも、常設展示とは異なる新たな切り口で、上方演芸に親しんでいただけるような展示を行うこと。
- ・落語、漫才、講談、浪曲、上方喜劇、諸芸といった幅広いジャンルの上方演芸をとりあげ、世代やプロダクションの垣根を超えた展示をつくること。
- ・上方演芸の歴史にもふれること。

令和元年度の企画展示「芸人さんは多才だ!」も、この方針に沿って企画されている。芸人さんは、本業に加えていろいろな分野で才能を発揮されている。その中から今回はアートに焦点を当て、落語、漫才などのジャンルごとに、芸人さんが作ったアート作品をご紹介しますことで、楽しみながら上方演芸やその歴史、芸人さんの魅力にふれていただけるような展示にしている。

そして、今展示が開催にいたるまでには、さまざまな紆余曲折があった。

一番初めの壁は、展示する資料を選ぶこと。当館の収蔵資料には近年の芸人さんの作品はなく、収蔵資料のみで上方演芸すべてのジャンルや世代の資料を集めることは難しかった。

老若男女を問わずご来館いただける展示にするために、プロダクションなどの関係各所から、

芸人さんのアート作品を借りることが急務となったものの、今度は、当館スタッフだけでそれができるのか…という新たな問題が出てきた。

そこで、近年の作品は、今展示のディレクション担当である藤田曜氏をとおして、芸人さんをはじめ、関係各所からお借りすることになった。

そのほかにもアート作品の基準や、小さなサイズの作品や手ぬぐいといった資料の展示方法の工夫についてなど、さまざまな課題があり、開催間際まで、何度も討論を重ねた。

最終的には、関係各所からのご協力のもと、お借りした作品と収蔵資料を合わせて、100点を超える展示資料が集まった。

たいへん恐縮ではあるが、この場を借りて、謹んでお礼を申しあげたい。

今回、アート作品として展示する当館の収蔵資料には、書や俳句にまつわるものが多い。それぞれに文字の美しさ、たたずまいの美しさがあり、そのどれもがとても魅力的な資料である。そして、これらの資料について、多くの方に作品の魅力を知っていただければと考え、展示資料の一部ではあるが、「浪曲師 富士月子の手あぶり(小さな火鉢)」と「三代目 桂米朝の手ぬぐい」の2点をご紹介します。

(2) 企画展示「芸人さんは多才だ！」の展示資料について

① 浪曲師 富士月子の手あぶり(小さな火鉢)〔資料コード〕 00158493



〔図①-1〕 富士月子の手あぶり(小さな火鉢)(資料コード 00158493)

こちらは、富士月子のご遺族より寄贈された手あぶり(小さな火鉢)(図①-1、以下「手あぶり」と記す)で、寄贈時の目録には、「身の回り品」に分類され、「自筆句入り」との記載がある。しかし、手あぶりに描かれている筆文字と富士山や茄子の絵が、富士月子ご本人によるものであるか、また、いつごろにどんな目的で作られたものなのかについては記されていない。そのため、今回この手あぶりをご紹介しますに際して、調査を行った。

まず、手あぶりに描かれているのは、富士山と茄子の絵および、筆文字による次の俳句。

- ◎ 柿干や 窓一ぱいに 富士晴れて 富士月子
- ◎ 古人の言葉 とうとし 茄子の花 富士月子

初めの「柿干や～」の句は、当館所蔵の『句集 秋扇』に掲載されている。2句目の「古人の～」の句の出典と、この火あぶりが作られた経緯は、今回の調査ではわからなかった。そこで、「柿干や～」の句について、調査を進めることにした。

※ なお「柿干や～」の句については、手あぶりとは『句集 秋扇』とで、送り仮名の表記が1か所異なっている。

- ・手あぶりの送り仮名表記 …「柿干や 窓一ぱいに 富士晴れて」
- ・『句集 秋扇』の送り仮名表記 …「柿干すや 窓一ぱいに 富士晴れて⁽¹⁾」

『句集 秋扇』は、浪曲師・富士月子の没後、三回忌の追善興行にあたり、ご息女の飯田節子氏によって編まれた句集である。収録されている俳句は、まず数年ごとの年代に区切られ、さらにその年代ごとに春・夏・秋・冬の四季別に分類されている(春・夏・秋・冬と副題がつけられている)。最終章の「昭和四十一年より 昭和五十一年まで⁽²⁾」のみ、副題が「病みての日日⁽³⁾」となり、四季別に分けられていない。

飯田氏は、句集のあとがきで、母親・富士月子の人となりや俳句のこと(師事された方など)について、詳しく述べられている。例えば、

- ・絵や俳句をたしなまれていた
- ・俳句は、コンクールで入賞されたこともある
- ・高浜虚子にも師事されていた
- ・「芸の旅⁽⁴⁾」の間に、季節の様子を俳句に詠まれていた
- ・句作のために旅に出られることもあった など。

また、この句集には、富士月子と交流のあった林喜代弘氏による序文がある。そのなかで「俳句への傾倒⁽⁵⁾」も、浪曲の表現に影響を与えていたと記されている。

さらに『浪界藝術家集』では、富士月子について、「亦浪界稀に見る教養と美貌の持主にして實にや典麗風雅な襟度は、何人も讃嘆してやまないものがある⁽⁶⁾」と絶賛されている。

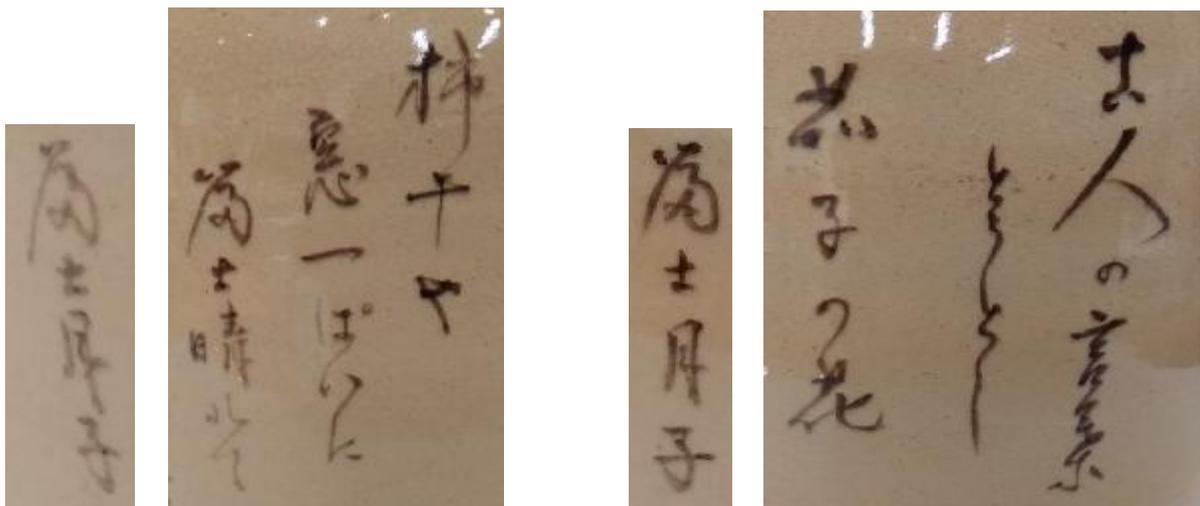
そして、「柿干や～」の句は、『句集 秋扇』のなかで、「昭和十四年より昭和二十年まで⁽⁷⁾」の「秋⁽⁸⁾」に掲載されている。そのことから、昭和14(1939)年から昭和20(1945)年の間に詠まれた、秋の句であることが分かった。

また、当館が所蔵している富士月子のパネル写真に、明治座の建物写真がある。写真の年代は不明であるものの、写っている建物には、3月28日から3日間、富士月子の公演があるとの垂れ幕がかかっている。このパネルの裏面には、ペンで「東京明治座へ進出 昭和13年」と記載がある。

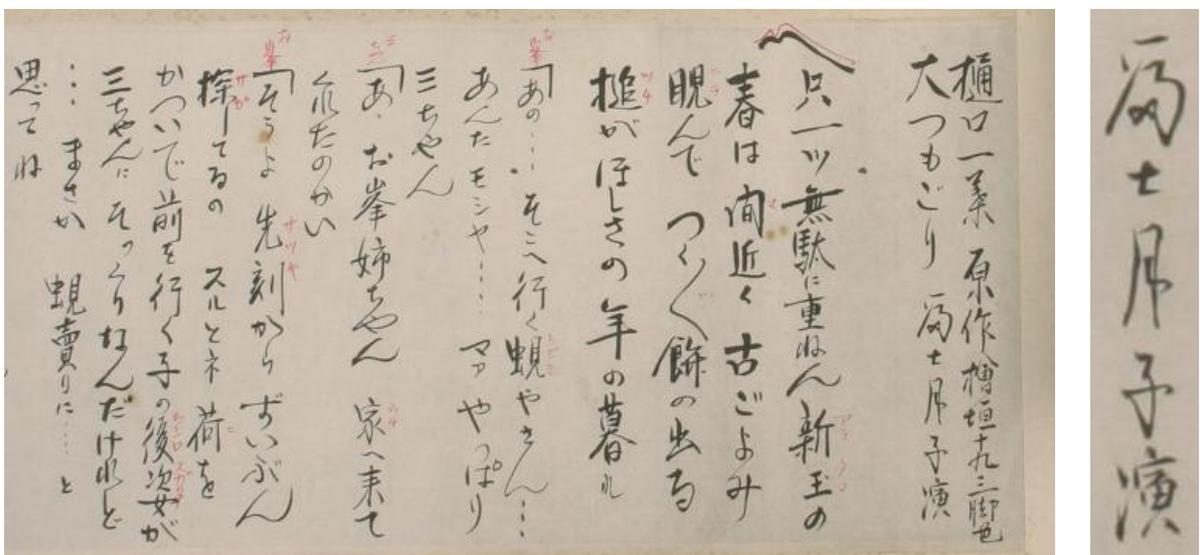
上記と俳句内の「富士晴れて」のことばより、関西以東の公演での移動途中に詠まれた句ではないかと推測できるが、明確な根拠となる資料は見つかっていない。

次に、手あぶりに描かれた文字がご本人によるものなのかを調べた。筆跡を比較した資料は、当館の収蔵資料「富士月子直筆浪曲台本『大つごもり』」〔図①-3〕である。

手あぶりの俳句を拡大したもの〔図①-2〕と、『大つごもり』を比較してみたところ、文字の形やとめ・はらいに共通点が多数見受けられ、特に名前の部分は非常に似かよっている。よって、手あぶりに描かれている文字は、ご本人の筆跡である可能性が高いと思われる。



〔図①-2〕手あぶりに描かれている俳句と名前(拡大) (資料コード 00158493)



〔図①-3〕富士月子直筆浪曲台本『大つごもり』(左:台本の一部、右:名前部分拡大) (資料コード 00309930)

富士月子 明治31(1898)年～昭和51(1976)年

大正・昭和期の浪曲師。

富山県にある寺院に生まれる。祖父母ゆずりの美声の持ち主で、幼いころより浪曲に親しみ、父親に反対されながらも、芸の道を志した。十代で上京した後は独学で浪曲の修業を積み、さらに二十代で大阪へ。井上晴夢(二代目 広沢虎吉)に弟子入りし、女流団「成美会」の一員となって、名を富士月子とする。品のある舞台は評判となり、初代春野百合子とともに、関西女流浪曲の双壁として人気を得た。

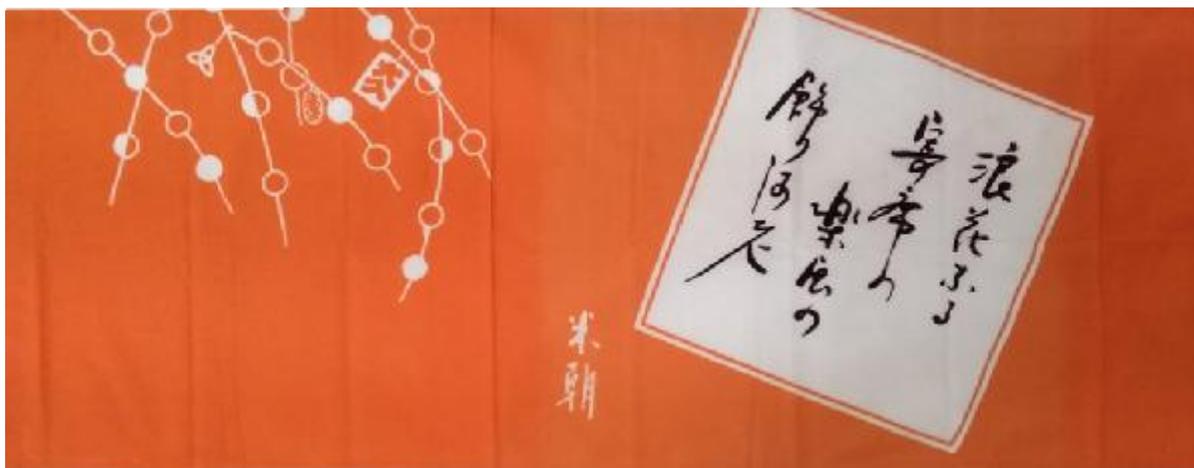
昭和36年(昭和35年とも)には、浪曲親友協会の会長を務め、昭和39年に大阪府民劇場賞を、翌40年に大阪文化祭賞を受賞した。活躍中の昭和41(1966)年、病に倒れ、長く病床に就くこととなった。また、富士月の栄をはじめ、多くの弟子を育てたことでも有名である。

このように、芸の道を邁進する一方で、絵や創作、俳句を好み、体調を崩すまでは、公演の移動中に俳句を作り、また、俳句旅行をするほど熱心に取り組んだという。

平成13年度には、第6回 上方演芸の殿堂入り名人として表彰された。

② 三代目 桂米朝の手ぬぐい〔資料コード〕00256719 (協力：株式会社米朝事務所)

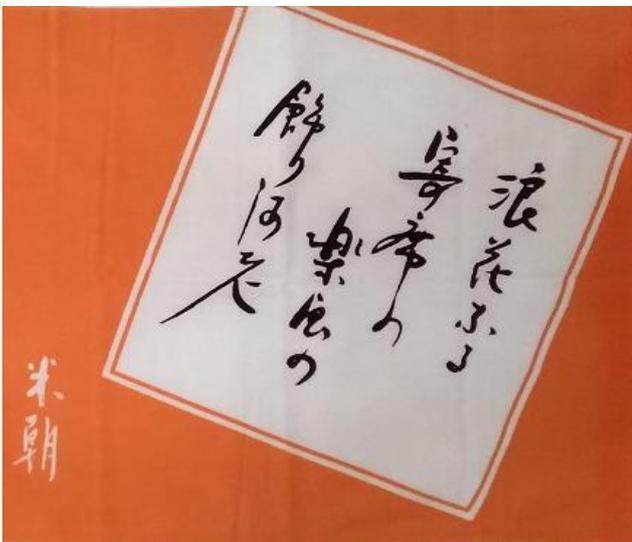
◎ 手ぬぐい全体



◎ 餅花部分拡大



◎ 俳句部分拡大



〔図②-1〕三代目 桂米朝の手ぬぐい(資料コード 00256719)

こちらは、平成8(1996)年に寄贈された手ぬぐいで、寄贈時の情報によると、同年1月3日に開催された桂米朝独演会にて、ご祝儀品として配布されたものとのこと。この手ぬぐいと、パンフレットおよび、チケット半券の3点を同時にご寄贈いただいている。

◎ 手ぬぐいに描かれている俳句

浪花なる 寄席の楽屋の 飾り海老 米朝

まずはじめに、上記の句が桂米朝ご本人によるものなのかを調べてみたところ、書籍『桂米朝句集』(103ページ)に収録されていることが分かり、桂米朝自作の句であることが判明した。

『桂米朝句集』の注釈によると、この句集には、主に東京やなぎ句会で詠まれた句が収められ、自筆の色紙も掲載しているとのこと。自筆の色紙については、句会で詠まれた俳句以外のものも含まれていると記されている。

この「浪花なる～」の句は、春夏秋冬の順に収められた米朝自筆の色紙のうち、一番はじめに掲載されている。

そして、この俳句は次の根拠4点より、新年にあたって詠まれた句であると考えられる。

- ・手ぬぐいが、平成8(1996)年1月3日の桂米朝独演会にて配られたものであること。
- ・この句の季語が「飾り海老」であること。
- ・手ぬぐいの左側には、米朝一門の紋である結び柏が入った餅花の絵が描かれていること。
- ・『桂米朝句集』のなかで、色紙に描かれた俳句は、春、夏、秋、冬の順に並べているとの記載があること。

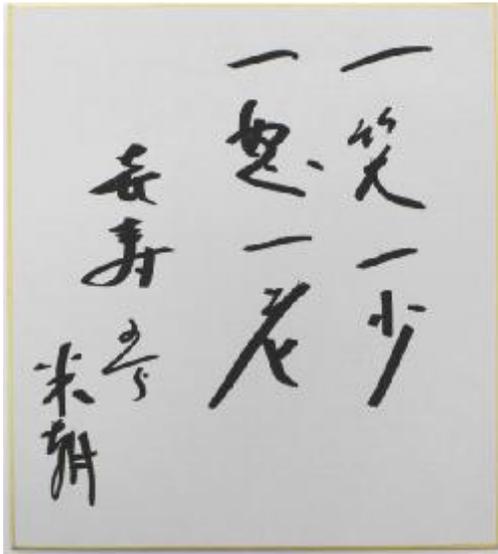
今回ご紹介している手ぬぐいと同じと思われる写真が、図録『米寿 桂米朝 2013』や『特別展「人間国宝・桂米朝とその時代」展覧会図録』に掲載されているが、手ぬぐいについての情報や、年代の記載は見当たらなかった。

俳句が桂米朝ご本人によるものと判明したので、手ぬぐいに描かれている文字や餅花の絵も自筆なのかということや手ぬぐいの色について、続けて調査を行った。

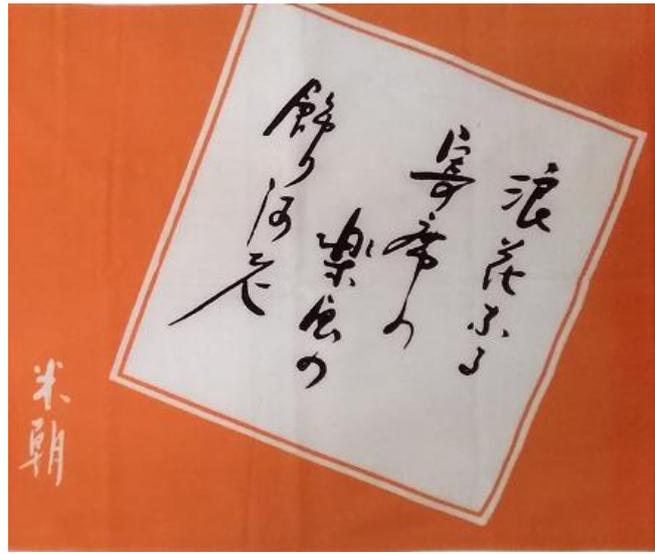
まず、餅花の絵に関しては、自筆の根拠となる資料が見つからなかった。また、手ぬぐいの色に関しても、鏡餅の橙の色に由来するののかもと思われるが、こちらも不明である。

次に、手ぬぐいに描かれている文字〔図②-2〕も桂米朝ご本人によるものであるかを調べるため、『桂米朝句集』の色紙の文字と見比べてみた。両者はまったく同じ筆跡ではないものの、止めやはらい、文字の形は共通点も多い。さらに、当館が収蔵している桂米朝直筆の色紙〔図②-3〕とも比較してみたところ、3点の資料に共通して書かれている「老」の字形がうりふたつであった。それぞれの資料全体を見ても、3点ともに、非常によく似た筆跡である。

よって、手ぬぐいの文字も『桂米朝句集』の色紙や当館所蔵の直筆色紙と同様に、桂米朝の自筆であると考えられる。



〔図②-2〕色紙 田中嘉寶コレクション 桂米朝
(資料コード 00443069)



〔図②-3〕手ぬぐい(俳句部分拡大)
(資料コード 00256719)

三代目 桂米朝 大正 14(1925)年～平成 27(2015)年

兵庫県姫路市出身の落語家。

正岡容門下時代、上方落語消滅の危機に直面し、四代目桂米團治に入門。上方落語の復興に大きな役割を果たした。落語のみならず、上方文化全般に造詣が深く、著書多数。

その功績から受賞歴も多く、平成 8 (1996)年には、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。

また、俳句好きの父親の影響で幼いころより俳句に親しみ、正岡容の門下生による「東京やなぎ句会」に参加していた。俳号は、八十八。

平成 22 年度には、第 14 回 上方演芸の殿堂入り名人として表彰された。

(3)おわりに

このたび、企画展示「芸人さんは多才だ！」の展示資料として、先に挙げた当館所蔵の 2 点をご紹介したが、このほかにも、初公開となる横山ホットブラザーズのがらくた楽器(個人所蔵)をはじめ、たくさんの貴重な資料を展示している。

お借りしている資料の数々は、芸人さんや関係各所からのご協力があったからこそ、集めることのできた貴重なものばかりであり、感謝の念に堪えない。

演芸は、大勢の人が気軽に楽しめる芸能。今展示も、演芸のように見て楽しい展示をめざし、当館スタッフが一丸となって企画した。たくさんの方にお楽しみいただければ幸いである。

演芸、芸術…多方面で活躍される芸人さんの作品をとおして、芸人さんをはじめ、上方演芸の魅力・歴史に親しんでいただける機会となればと願っている。

【註】

- (1) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年、p. 35
- (2) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年、p. 133
- (3) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年、p. 135
- (4) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年、p. 146
- (5) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年
- (6) 北野竹治編『浪界藝術家集』、大日本浪曲光榮社、昭和11(1936)年
- (7) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年、p. 1
- (8) 富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年、p. 25

<参考文献>

- 北野竹治編『浪界藝術家集』、大日本浪曲光榮社、昭和11(1936)年
正岡容『雲右衛門以後』、文林堂双魚房、昭和19(1944)年
正岡容『日本浪曲史』、南北社、昭和43(1968)年
富士月子著、飯田節子発行『句集 秋扇』、昭和53(1978)年
相羽秋夫『現代上方演芸人名鑑』昭和55(1980)年、少年社
倉田喜弘・難波隆之編『日本芸能人名事典』、三省堂、平成7(1995)年
唯二郎『実録 浪曲史』、東峰書房、平成11(1999)年
桂米朝『桂米朝 私の履歴書』、日本経済新聞出版社、平成19(2007)年
桂米朝『米朝よもやま噺』、朝日新聞出版、平成22(2010)年
桂米朝『桂米朝句集』、岩波書店、平成23(2011)年
唐見博編『米寿 桂米朝2013』、株式会社ブリーゼアーツ、平成24(2012)年
兵庫県立歴史博物館『特別展「人間国宝・桂米朝とその時代」展覧会図録』、平成29(2017)年

資料紹介（資料整理の現場から）

戎橋松竹のポスター

高草 瞳（上方演芸資料館学芸員）

今回は花月亭九里丸のご遺族から寄贈された、戎橋松竹開館直後の昭和22（1947）年9月～23（1948）年2月のポスターをご紹介します。戎橋松竹は昭和22年9月に開場。昭和23年3月1日、京都富貴が寄席として発足するにあたり、花月亭九里丸と二代目桂春団治を中心とした浪花新生三友派が結成、戎橋松竹を脱退する⁽¹⁾。当館には開館からそれまでの期間のポスターの一部がご寄贈されており、今回はそちらをご紹介しますと思う。

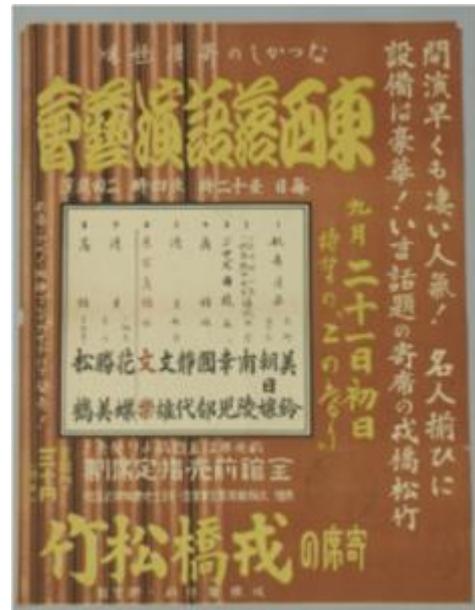
1. 東西落語演芸会 昭和22年9月21日～30日

〔資料コード〕00252650（協力：松竹株式会社）

【出演者】

花柳美鈴・浅田家朝日嬢（浅田アサヒ）、二代目旭堂南陵、森幸児、橘ノ円都、都家文雄・静代、八代目桂文楽、一輪亭花蝶・荒川勝美、五代目笑福亭松鶴

このポスターは開場直後の「東西落語演芸会」のもの。歌舞道楽連の浅田朝日嬢は、のちに荒川芳政とコンビを組む浅田アサヒ⁽²⁾。



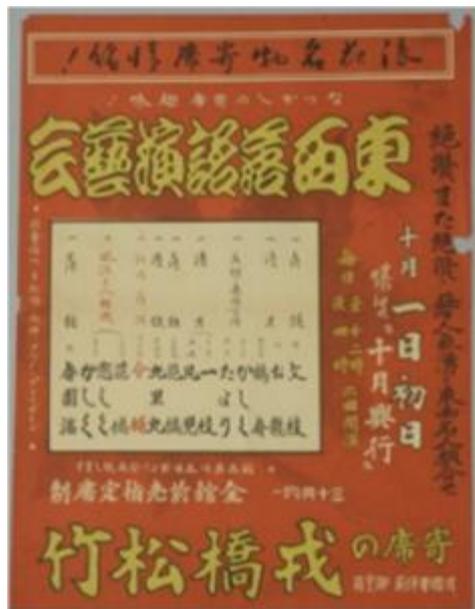
2. 東西落語演芸会 昭和22年10月1日初日

〔資料コード〕00252676（協力：松竹株式会社）

【出演者】

四代目桂文枝、河内家鶴春・浜お龍、文の家かしく（三代目笑福亭福松）・たより、西条凡児・千早一枝、二代目立花家花橋、花月亭九里丸、五代目古今亭今輔、文の家かしく・恋しく

一時松葉家奴と漫才コンビを組んでいた浜お龍⁽³⁾と初代河内家芳春の弟子の河内家鶴春⁽⁴⁾が漫才で出演。ほか漫才では西条凡児が千早一枝とコンビを組んで出演していた。



3. 東西落語演芸会 昭和22年10月11日初日 [資料コード] 00252700、00252718、00252726
 (協力：松竹株式会社)

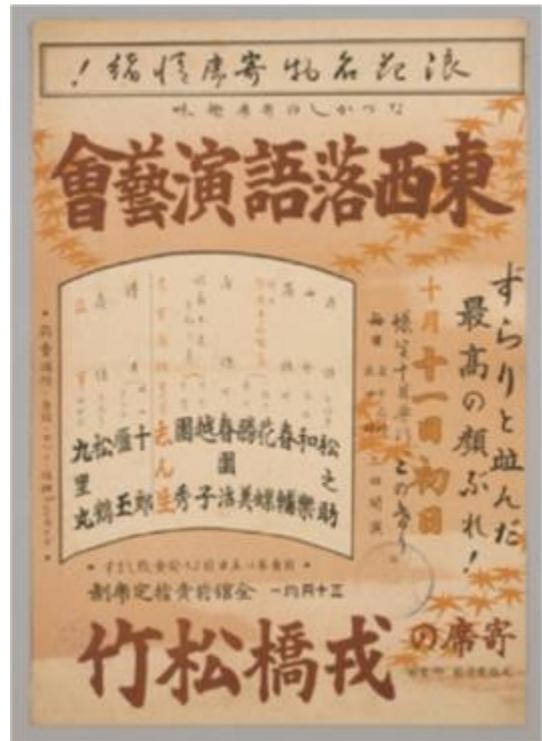
【出演者】

笑福亭松之助（六代目笑福亭松鶴）、宝家和楽、初代桂春輔、一輪亭花蝶・荒川勝美、二代目桂春団治、竹本越子・手塚団秀、五代目古今亭志ん生、林田十郎・芦の家雁玉、五代目笑福亭松鶴、丹波家九里丸（花月亭九里丸）

このポスターでは、五代目松鶴、初代松之助こと六代目の笑福亭松鶴が親子出演している。漫才では林田十郎・雁玉が出演。そして監事として丹波家九里の名がある。

開館して一か月後の公演であり、キャッチコピーの「最高の顔ぶれ」という言葉からも気合を感じられる豪華な出演者であったことがわかる。

今回紹介するポスターの中で、二代目桂春団治と五代目笑福亭松鶴と一緒に出演しているのはこの一枚だけである。



4. 東西落語演芸会 昭和22年11月1日初日 [資料コード] 00252783、00252791
 (協力：松竹株式会社)

【出演者】

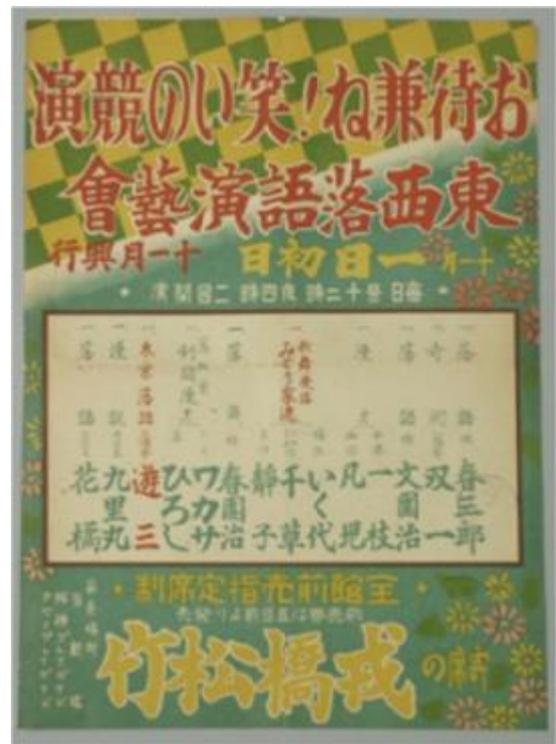
桂春三郎、一陽斎双一（ワンダー正光）、四代目桂文団治、西条凡児・千早一枝、嬉乃いく代、仁和之千草、吉乃静子、二代目桂春団治、ミスワカナ・島ひろし、二代目三遊亭遊三、丹波家九里丸（花月亭九里丸）、立花家花橘

桂春三郎は、当館所蔵の資料では、このポスターと寄席のパレス（昭和22年9月～）のポスターにその名がみられる。

落語系図によると、初代桂春団治の弟子に桂春三郎、そして初代桂春団治の門人である初代桂春輔の弟子にも桂春三郎が存在している。春輔の弟子の春三郎はのちの林家染蔵と書かれている。⁽⁵⁾

林家染蔵は大正時代にレコードを出し、昭和16年に死亡したとされている⁽⁶⁾ため、このポスターの春三郎とは違う人物と思われる。

誤植も疑ったが、当館所蔵の寄席のパレスの同時期のポスター、昭和22年11月、昭和23年2月にも桂春輔とともに出演しており、このポスターは誤植ではないようだ。



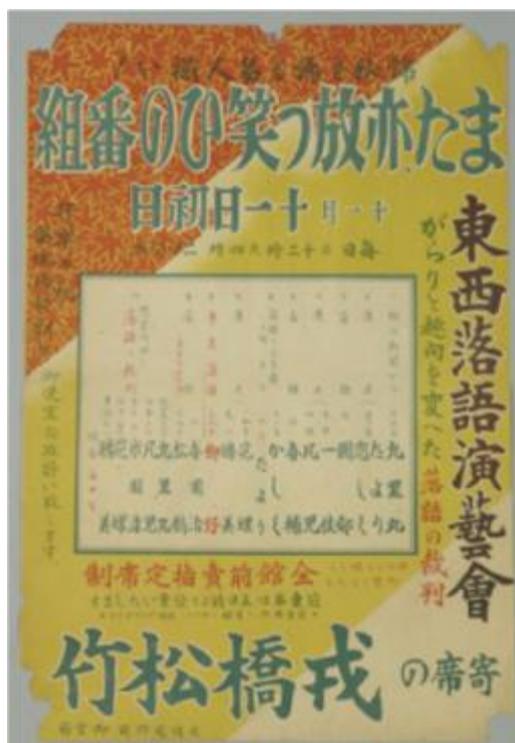
5. 東西落語演芸会 昭和22年11月11日初日 [資料コード] 00252809 (協力: 松竹株式会社)

【出演者】

丹波家九里丸、文の家たより・恋しく、橘ノ円都、西条凡児・千早一枝、初代桂春輔、文の家かしく・たより、一輪亭花蝶・荒川勝美、三代目春風亭柳好、二代目桂春団治、五代目笑福亭松鶴、四代目桂米団治

この月の1日、兵庫県高架下のシネマパレスが寄席のパレスとして開場した。当館所蔵の開館時のポスターを確認したところ、その時の出演者に、初代桂春輔、文の家かしく・たより・恋しく、橘ノ円都、二代目桂春団治の名もみられた。

初代桂春輔は、初代桂春団治の一門にいたが、戦前から師匠を転々としながら活動。戦後、戎橋松竹や寄席のパレスで活躍していた。昭和23年秋に寄席のパレス出演後、楽屋で倒れたのち入院、その後復帰することなく死亡したといわれている。⁽⁷⁾



6. 東西落語演芸会 昭和23年1月21日~30日⁽⁸⁾ [資料コード] 00252767 (協力: 松竹株式会社)

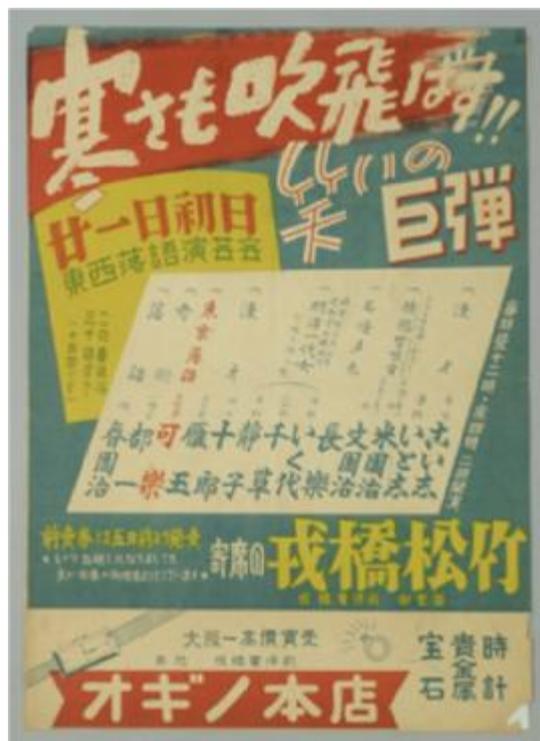
【出演者】

夢路いと志・喜味古い志、四代目桂米団治、四代目桂文団治、長楽(柳亭長楽か)、嬉野いく代、仁和野千草、吉野静子、林田十郎・芦の家雁玉、八代目三笑亭可楽、一陽斎都一(ジャグラー都一)、二代目桂春団治

漫才で夢路いと志・喜味こいしが出演。

「米朝・上岡が語る昭和上方漫才」のインタビューの中で喜味こいしが、「戎橋松竹というのは私らは一回しか出たことないねん。」と語っている。⁽⁹⁾

当時の新聞広告や、当館の資料からこのポスターの他の公演にも出演していないか調べてみたが、再度の出演は現時点発見できていない。



7. お臍のやどがえ 昭和23年2月1日初日 [資料コード] 00252742 (協力：松竹株式会社)

【出演者】

笑福亭光鶴（六代目笑福亭松鶴）、立花家花橋、浪花家市松・芳子、橘ノ円都、五代目笑福亭松鶴、宝家和楽、桂文治、堀江柳子、島八郎、みどりや連（嬉野いく代・仁和野千草・吉野静子）、丹波家九里丸（花月亭九里丸）

六代目笑福亭松鶴が昭和23年1月に三代目光鶴を襲名し、このポスターでは光鶴の名で出演している。

そのほかではのちの志摩八郎が妻の堀江柳子と出演している。二人のコンビ結成は昭和25年に志摩八郎が宝塚新芸座に関与していた頃に堀江柳子（現夫人）と組んだといわれている⁽¹⁰⁾。

しかしこのポスターと同年の5月20日、大阪毎日新聞神戸版の寄席のパレスの広告「MZ研進会総出演第2回 新作漫才発表会」にも八郎・柳子として出演しており、昭和25年以前にも2人で舞台上がっていたことが確認できた⁽¹¹⁾。



8. 穴手本提灯蔵 昭和23年2月11日初日⁽¹²⁾ [資料コード] 00252585 (協力：松竹株式会社)

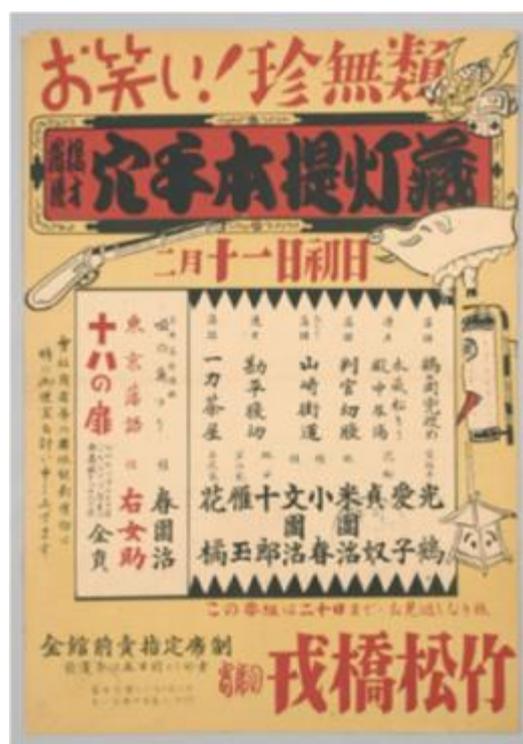
【出演者】

笑福亭 光鶴（六代目笑福亭松鶴）、花柳 愛子・貞奴、四代目桂米団治、四代目桂文団治、桂小春（三代目桂春団治）、芦の家 雁玉・林田十郎、立花家 花橋、二代目桂春団治、二代目桂右女助（六代目三樹家小勝）

忠臣蔵の趣向で組まれた特徴のあるプログラム。

二代目桂春団治と桂小春こと三代目桂春団治が共演している。

十八の扉の下には「NHKでは二十の扉 こちらでは知恵の無盡蔵から十八の扉」と説明がかけられている。「二十の扉」は昭和22年11月にスタートしたNHKの番組⁽¹³⁾。アメリカのクイズ番組をモデルにGHQ民間情報教育局の指導で制作された⁽¹⁴⁾。



資料の時期は、資料に押印されている広告税などの検印の年月日、当時の新聞の広告や文献などから調査。一部出演者については、同時期の寄席のパレスのポスターの出演者との照合をおこなった。

今回の調査は、昨年度にオープンした展示室や当館 HP でのデジタル公開などの今後の活用にもつなげていきたいと考えている。いつ、そのような形でお披露目できるかわからないが、このような紙面上の小さな画像ではなく、細かい字や隅々までご覧いただけるように準備していきたい。

【註】

- (1) 戸田学『六世松鶴はなし』岩波書店、平成15（2004）、p 294～295
- (2) 相羽秋夫『現代上方演芸人名鑑』、昭和55（1980）、p 18
- (3) 相羽秋夫『現代上方演芸人名鑑』、昭和55（1980）、p 174
- (4) 花月亭九里丸『笑根系図』、昭和36（1961）
- (5) 植村秀一郎『落語系図』名著刊行会、昭和40（1965）、p 91
- (6) 橋本礼一「上方噺家列伝」『芸能懇話 第二十一号』、大阪芸能懇話会、平成28（2016）、p 59
- (7) 露の五郎「物語戦後上方落語史（第二回）」『上方芸能 第29号』昭和48（1973）、p 90～91
- (8) 朝日新聞 大阪版 昭和23年1月21日 朝日新聞
- (9) 桂米朝・上岡龍太郎『米朝上岡の昭和上方漫才』、朝日新聞社、平成12（2002）、p 279～280
- (10) 志磨八郎『昭和爆笑漫才集』漫才作家協会、昭和39（1974）、p 209
- (11) 毎日新聞 大阪本社神戸版 昭和23年5月20日
- (12) 豊田善敬『戦後（昭和20～23年）の上方落語～五代目笑福亭松鶴を中心とした出演記録～』、私家版、平成21（2009）、p 43
- (13) 日本放送協会大阪放送局『NHK大阪放送局七十年こちらJOBK』、p 291
- (14) NHKアーカイブスHP内NHK放送史の「二十の扉（ラジオ）」のページ内動画
https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060078_00000

<参考文献>

朝日新聞 大阪版 昭和22～23年

毎日新聞 大阪本社神戸版 昭和22～23年

和多田勝『笑芸人生劇場』、少年社、昭和56年（1981）

諸芸懇話会、大阪芸能懇話会『古今東西落語家事典』、平凡社、平成元年（1989）

倉田喜弘 藤波隆之『日本芸能人名事典』、三省堂、平成7（1995）

豊田善敬『桂春団治 はなしの世界』東方出版、平成8（1996）

桂文枝『あんけら荘夜話』青蛙房、平成8（1996）

桂米之助『上方落語よもやま草紙』、たる出版、平成10（1998）

河本寿栄『二代目さん 二代目桂春団治の芸と人』青蛙房、平成14（2002）

桂米朝『四世米団治寄席随筆』岩波書店、平成19（2007）

資料紹介（資料整理の現場から）

五郎劇用脚本『蔭日向』（昭和二十三年一月名古屋御園座上演） — 十吾改訂「訂正脚本」、—

島田 智子（上方演芸資料館司書）

平成 29 年度から 2 ヶ年にわたり、曾我廼家五郎がまだ歌舞伎役者の中村珊之助だった明治 30 年代の貴重な稿本について、当館資料整理部会長である荻田清氏から紹介があった。今回は時代を下り、晩年の五郎をめぐる資料を紹介したい。昭和 23 年 1 月名古屋御園座での五郎劇用脚本『蔭日向』である。（当館の分類上は「台本」であるが、原資料に「脚本」と書かれていることから、本稿で当該資料を指すときは「脚本」を用いる。また、新字体を用いることとする。）

〔資料名〕『蔭日向』（高須文七文庫 喜劇台本）

〔大きさ〕タテ 24.7cm ヨコ上部は 16.7cm、下部は 17cm

（上部のり付けにより下辺の方がやや長い）

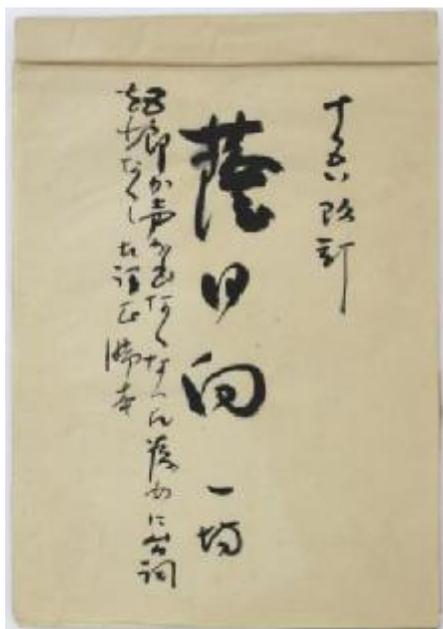
〔枚数〕表紙 1、解説 1、脚本表紙 1、脚本本文 41、裏表紙 1

（表紙：墨書き、解説：ボールペン書き（黒）、脚本：ペン書き（青））

脚本の本文には左上に頁数が書かれている。「4」が 2 回あり、「10」は欠。

〔用紙〕表紙と裏表紙は同じ紙。脚本は縦罫線入りで右下に「双鳩笑」とある。行数は 10 行。

〔資料コード〕00267344（協力：松竹株式会社、西海穰治氏）



〔図 1〕表紙

高須文七文庫の喜劇台本は、作者名、タイトル、場の数を墨書きした表紙があり、中身と一緒に背をくるんで貼り合わせてあるものが多い。中身の台本の筆跡はバラバラだが墨書きの筆跡は同じであり、整理の際に文七が書いたと思われる。なお、高須文七文庫の台本のなかに十吾もしくは十吾の筆名「茂林寺文福」が見える資料は稿末の別表のとおり 28 点あるが、背ではなく天がくるのであるもの、直筆のものはこの『蔭日向』のみであり、表紙〔図 1〕には次のように書かれている。

十吾改訂

蔭日向 一場

五郎が声が出なくなつた^(???)ために台詞
を少なくした訂正脚本

昭和 23 年 3 月に受けた喉頭がんの手術の後、五郎が無声俳優になったことはよく知られているが、それ以前から声の調子は悪く、手術の前年（昭和 22 年）の四天王寺の盆おどり会場ではマイクを使っても声が通らなかった⁽¹⁾。そんな五郎のために「台詞を少なく」改訂したのが、この脚本である。本稿で使用している「訂正脚本」という言葉はこちらに依る。

改訂をおこなった曾我廼家十吾⁽²⁾は、本名西海文吾。神戸市出身。明治 24（1891）年 12 月 4 日生、昭和 49（1974）年 4 月 7 日没、享年 82 歳⁽³⁾。

三田純市氏によると⁽⁴⁾、十吾は俄の大門亭大蝶一座の子役として 8 歳で初舞台を踏み、文蝶の名で活躍。11 歳のとき、俄の脚本、演出、プロデューサーのような仕事をしていた大阪の尾上和田蔵に弟子入りし、道頓堀や千日前で「およそ興行物と名のつくものならなんでも、むさぼるように観た。⁽⁵⁾」明治 39（1906）年、五郎・十郎の曾我廼家兄弟劇で人気を博していた曾我廼家十郎に弟子入りし、文吾の文と十郎の本名福松の福とで曾我廼家文福になるが、やがて一座を離脱し、中小劇団を転々とする。五郎と分裂した十郎の求めに応じて一時的に十郎一座に加わるなどした後、信濃家尾十という役者に永井茶釜を名乗らせ、自分は茂林寺文福となって大正 5（1916）年に文福茶釜一座をたちあげ、九州を拠点に人気を得る。昭和 2（1927）年、中座での十郎の三回忌追善興行に際し五郎劇に加入、「その時、曾我廼家十五と名乗るが、退団後は五の字を吾に変え、曾我廼家十吾となる。⁽⁶⁾」昭和 3（1928）年 9 月、渋谷一雄（翌年二代目渋谷天外を襲名）とともに松竹家庭劇を結成するが、五郎の晩年は五郎劇に加わって支えた。昭和 23（1948）年に五郎が亡くなると、残された五郎劇のメンバーなどと合体して松竹新喜劇を発足。昭和 31（1956）年に退団して翌年家庭劇を再挙する。しかし、昭和 40（1965）年には解散。その後は記念公演や新喜劇への客演で存在感を見せた。

おばあさん役が当たり役。茂林寺文福の筆名で多くの脚本を書いた。

「大阪喜劇の古流の演技を身につけている点、大阪芸能の貴重な文化財的存在⁽⁷⁾」であり、三田氏は「十吾先生は名人、天外オヤジは天才や。わしは名人にはなれそうもないワ」という藤山寛美の言葉を伝えている⁽⁸⁾。

高須文七に対しては、大槻茂氏が『喜劇の帝王 渋谷天外伝』で、10 歳で父を失い道頓堀の芝居茶屋「岡嶋」に身を寄せていた二代目天外（当時はまだ本名の「一雄」）の様子⁽⁹⁾や、「館直志」のペンネームの由来⁽¹⁰⁾を聞くなどしており、次のように紹介している。

文七は曾我廼家十吾の弟子で、昭和三年の松竹家庭劇の旗揚げにも加わっている。⁽¹¹⁾

本名は高須松太郎。明治三十八年八月、山口県下関市に生まれた。大正十二年、曾我廼家文福とっていた十吾の弟子になり、師匠の文と曾我廼家の慣習である数字をもらって文七を名乗った。松竹新喜劇では、十吾付きの文芸部員のような仕事をしてきた。平成八年一月、九十歳で死去。⁽¹²⁾

また、文七は同書で次のように話している。

「私は大正十二年に、文福の弟子になりましたんです。九州では、文福茶釜言うたら、相当、客入れてました。曾我廼家五郎さんが九州に入ってきて、五郎さんの狂言を先に上演してみたり、そういうことをやって対抗してましたんです。十三年には、七代目松本幸四郎の番頭してた方が太夫元で曾我廼家文福一座と言うのが出来まして、静岡、名古屋とか京都の戎

座とかへ回りました。大正天皇が亡くなった時分は、東京で一か月ほど暮らしました。

昭和のかかりに太夫元の金が詰まりまして、ちょうど十郎さんが亡くなって三回忌があり、文福は一年契約で五郎主催の追善興行に出ることになり、五郎劇に入ったわけです。私は、そのまま東京に残りました。昭和三年に家庭劇をこしらえるということで、私は師匠のところへ帰ったんです」⁽¹³⁾

以上より、文七は十吾に非常に近い人物であったといえる。その文七が、訂正脚本『蔭日向』の表紙の次の頁に、この脚本にまつわる解説〔図2〕を残している。以下に全文を紹介する。

〔訂正の書き込みがあるときは書き込みに従った。抹消してある場合はその部分に「消」の符号をつけて（ ）内に示した。〕

昭和二十三年一月興行の五郎劇上演脚本

二十二年の暮、大阪歌舞伎座出演の時 喉頭癌でもう
五郎の声は止まりかけていた。

三年の正月興行が定ついたので^(??)助に十吾を加入させた。

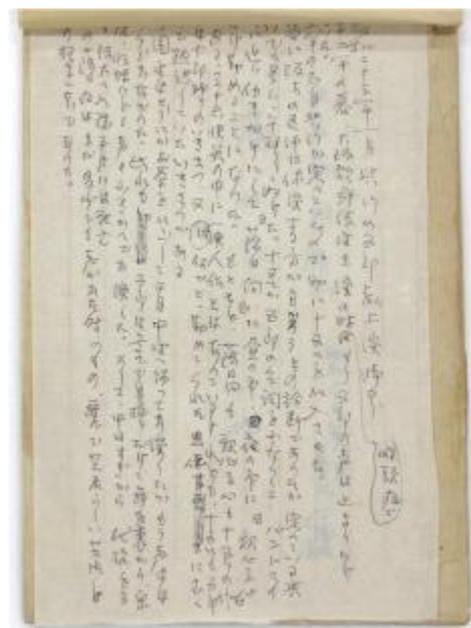
暮に阪大の医師は休演する方が良からうとの診断であつたが 定つている興行でもあるし、無理して助けた。十吾が五郎の台詞を少なくして パントマイムに近い^(??)働きだけにして『蔭日向』に昼の部・夜の部に『親心子心』だけ勤めることになつた。もともと、蔭日向も親心子心も十吾の作である。三十六快笑の中に一塚漁人作とはなつてはいるけれども、十吾も五郎には十郎師とのいきさつ、又何かと、勤めてくれた恩儀^(??)（「消」を感じて）にむくいて黙認していたいきさつがある

御園座はどうにかお茶をにごして二月中座へ帰つて出演したが、もう声はほとんど出なかつた。これも（「消」どうにか）五郎は無言で身振りだけで舞台裏から泉虎・明蝶なども声のふきかへで出演した。そして、中日すぎから 代役を立てて阪大へ入院 三月には死亡

此の蔭日向はまだ多少でも声が出た時のもの。舞台上芝居らしい芝居はこの狂言二本であつた。

ここには看過できない点が2つある。1つめは、「もともと、蔭日向も親心子心も十吾の作である」という点、もう1つは五郎の死亡月を「三月」としている点である。実際の命日は11月1日なので大きな乖離がある。だが、これらの考証については別稿に譲り、本稿では『蔭日向』とはいつ頃から演じられてきたどのような作品か、また、元々の『蔭日向』と訂正脚本はどう違ふのかについて述べる。

『蔭日向』は、昭和5（1930）年7月からアルスより順次刊行された『曾我廼家五郎全集』第8巻の表題作でもあり（背表紙や内容一覧でのタイトルは「蔭日向」だが、標題紙や奥付の表記は「陰日向」。以下「全集」と略す）、全集での設定は次のとおりである。⁽¹⁴⁾

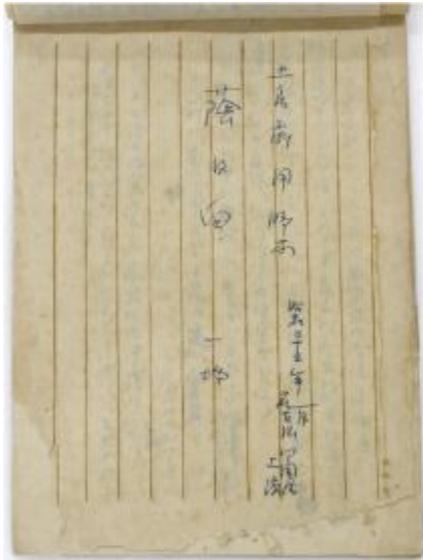


〔図2〕解説

場所 天王寺附近ガード下

時 現代 (次に登場人物の一覧が続くが後に示す)

本舞台平舞台中央に大なるガード、殆ど七分通り迄半円形の穴形を設け、其の他は一面の市外線の土手ガード鉄骨コンクリートにて作る⁽⁷⁷⁾。穴門の向うは町屋遠見を見せる。通行の人々は左右に出入する様にする。穴門の上手に榎木の大樹を置き、枝は低く垂れて冠さつて居る。其の下に屋台車を据ゑ、コツブ⁽⁷⁸⁾其の他氷屋の小道具を並べある。其の傍に四斗樽の上に板を渡し氷の塊りを置き、正宗の壇に入れたる冷し飴十数本を並べる。其の隅に冷し飴と記せる旗を立てる、よき捨床几を置く。夕に近き光線は日を強く、土手を越しててらす。すべて天王寺附近のガード下の場面。けたまましき飛行機のプロペラの音を聞かして、静に、幕明く。



〔図3〕脚本表紙

一方、訂正脚本の表紙〔図3〕には

五郎劇用脚本 昭和二十三年一月
名古屋御園座
上演
蔭日向 一場

と書かれており、表紙をめくると舞台の説明がある。

場所は飛田遊郭に近い今池高架線のガード附近、
時は現代の冬 雪が積んでゐる 夕暮れ時 舞台道具は
雪持の高架線 中央にガード 向うに今池停車所へ登り口
片脇に各商店の広告看板とバラツクの住宅が見える

ガード上手に材木となが丸太木 (消立) の置場
その前に屋台車のしる屋の店 (消店の前) 屋台の前ひさしに
かすじると染めぬいたのうれ (筆者註：暖簾か) 屋台の下手横に
客シヨキ (筆者註：床几か) 洗いバケツ 新しいバケツにしやく、三尺の板戸
二枚が風よけに置てある

時は現代で夕暮れ時のガード下という設定は同じだが、地名(今池/天王寺)や季節(冬/夏)が違い、屋台で扱う商品も季節に合わせて変わっている(かすじる/冷し飴)。また、訂正脚本には登場人物の一覧はないものの、内容を読むと主役は「お老婆さん」、全集では「阿部作兵衛」と、性別まで異なる。これらの変更が全て声が出なくなった五郎のためになされたものであるかを確認するため、まず初めに『松竹百年史 演劇資料』⁽¹⁵⁾や鍛冶明彦氏による「曾我廼家喜劇上演記録」(1) - (15) (歌舞伎学会誌『歌舞伎 研究と批評』43 - 57号⁽¹⁶⁾所収)、五郎の著作『十五年の足跡』等で『蔭日向』の上演記録を調査し、現存する絵本(公演パンフレット)等から得られた情報とともに〔表1〕にまとめた。

〔表1〕『蔭日向』上演記録（『蔭日向』『かげひなた』等の表記も含む。）

公演時期／ 出版年月	公演名／資料名等	劇場	曾我廼家五郎『十五年の足跡』双雅房、昭和14（1939）年	舞台設定
明治43年4月 15日-	『楽天会』 四の替 かげひなた	道頓堀朝日座		
明治43年11月 15日-	『喜劇楽天会』 二の替 かげひなた	南座		
明治44年5月	『楽天会一座』 二の替 影ひなた	本郷座		
明治44年10月 14日-	『楽天会一派』 二の替 かげひなた	堂島座		
大正5年11月 31日-	深沢恒造、五味国男、大井新太郎一派 かげひなた	京都明治座		
大正6年8月31 日-9月13日	『楽天会』 かげひなた	中座		
大正6年10月 11日-	『楽天会』 蔭日向	夷谷座 （新京極）		
大正6年11月 26日-	『楽天会一座』 蔭日向	新富座		
大正7年5月 9日-	『楽天会』 蔭日向	中央劇場 （新開地）		
大正7年5月	木下、深沢一派 三の替 かげひなた	本郷座		
昭和2年9月 15日-26日	『曾我廼家五郎一座新編朝記念興行』 四、蔭日向 一場	大阪中座		
昭和2年10月 1-10日	『曾我廼家五郎劇』 四、蔭日向 一場	京都南座		
昭和2年10月 12日-17日	『満州帰朝披露興行』 四、蔭日向 一場	名古屋御園座		
昭和2年11月 （日程不詳）	二、蔭日向 一場	巡業公演		
昭和2年11月 5日、6日	二、蔭日向 一場	長崎南座		
昭和2年11月 9日、10日	二、蔭日向	小倉勝山劇場		
昭和2年11月 13日、14日	二、蔭日向 一場	下関弁天座		
昭和3年3月 1日-	三、蔭日向 一場	新橋演舞場	第三の『蔭日向』で、雪布の上へ更に二、三ヶ所ばかり泥布を敷いた舞台飾りが親切でよい。五郎の汁粉屋が行衛知れずとなつたやくざな息子を案じてある親心を主題にした人情劇であるが、沢山の子を持って余してある者と、子がなくて淋しがつてある者とが、落ち合つて身上話からだん／＼本題に入る段取がうまい。十五の放浪者もよくしてあるが、此の役を思ひ遣りのいゝ訳の分つた人物にしたのは旧劇の型で余り作り過ぎる、只愚かな少年にした方が自然であらう。 （『昭和三年の巻』月もおぼろー伊原青々園先生評（三月六日、都新聞）p.66）	或る雪解のガード下
昭和3年12月 26日	二、蔭日向	大阪朝日会館		
昭和6年6月 17日-28日	『曾我廼家五郎一座』 二の替 二、蔭日向 一場	東京帝国劇場 （丸の内）	二十五日で打ち揚げて、六月は又帝劇へいよ／＼一座そつくり江戸ツ子になつてしまひさう。 （『昭和六年の巻』日々好日 p.161）	或る郊外のガード下
昭和6年7月刊 ※	曾我廼家五郎全集 第八巻 「蔭日向」			天王寺附近のガード下
昭和10年1月 19日-29日	二の替 二、蔭日向 一場	新橋演舞場	十九日二の替り。 第一、三つ巴 第二、蔭日向 第三、樽屋おせん 第四、情の雪解 第五、背負投 連日満員の大打入袋を載いて好評裡に二十七日千秋楽、新歌舞伎座へ引つ越しました。 （『昭和十年の巻』十年景氣 p.262）	
昭和10年11月 3、10、17日	『曾我廼家五郎劇』 マチネー 三、蔭日向	大阪歌舞伎座		
昭和12年6月	『五九郎、五一郎一座』 三の替 かげひなた	金龍館 （浅草）		
昭和13年10月 8、9、15、16、17、 22、23日	土日祭日マチネー 二、蔭日向 一場 ※五郎病氣休演の為、演目変更 三、蔭日向 一場	新橋演舞場	第三は『蔭日向』で、五郎のした爺さんを大嬢が婆さんに直してやつてあるが、十吾の婆さんよりも現実的な人間味があり、相当にいゝ出来で、桃蝶の夕刊売が光つた。 （『昭和十三年の巻』あゝ氣がもめるー三宅三郎先生評（十月八日、国民新聞）p.372） *五郎ぬきの『五郎劇』（p.370）	
昭和20年1月 （日程不詳）	『曾我廼家五郎一座』 二の替 二、蔭日向	東京邦楽座 （丸の内）		
昭和23年1月	訂正脚本「蔭日向」	名古屋御園座		飛田遊郭に近い今池高架線のガード附近
昭和23年1月 1日-25日	第二部 二、蔭日向 一場	名古屋御園座		
昭和23年2月 1日-25日	『曾我廼家五郎劇』 曾我廼家十吾加入 第一部 二、蔭日向 一場	大阪中座		今池の高架線ガード下附近

塗りつぶした行は全集と訂正脚本

※CiNiiによる。架蔵本の奥付の貼り紙は第九巻のものだが、同じく「昭和六年七月」発行となっている。

明治後期から大正前期にかけて、楽天会が繰り返し『蔭日向』を上演している。また、新派や曾我廼家五九郎、五一郎一座による公演もあるが、いずれも内容が確認できない。五郎劇に絞って見ると、『蔭日向』の上演が初めて確認できるのは昭和2（1927）年9月、中座での公演である。この時の絵本は未見であるが、翌年3月の新橋演舞場公演の際の絵本を大阪府立中之島図書館が所蔵している。その中の「御挨拶」で五郎は「只新作の出来立てを、醒めぬ内にと御目にかけ候」と、この公演の演目が新作であることをうたっている。上演記録から推測すると、まず9月に新作を大阪中座にかけ、10月の京都南座と名古屋御園座公演で手直しをし、11月に巡業先の九州・中国地方でも上演して更に練り上げ、満を持して3月の新橋演舞場公演（東京での初披露）に臨んだのであろう。

続いて、絵本が確認できた昭和3年および6年の公演と、全集、訂正脚本の登場人物を一覧にしたものが〔表2〕である。（絵本はどちらも大阪府立中之島図書館蔵、全集は架蔵）

〔表2〕登場人物

昭和3年3月 (新橋演舞場公演の絵本より)		昭和6年6月 (帝国劇場公演の絵本より)		昭和6年7月 (『曾我廼家五郎全集』第8巻より)		昭和23年1月 訂正脚本	
しる屋阿部作兵衛	五郎	ひやし雨屋阿部作兵衛	五郎	冷し飴屋 阿部作兵衛		かすじる屋 お作婆さん (和田お作)	
辻車夫甚七	時右衛門	辻車夫甚七	一朝	其婦 お町		若労働者	
按摩	五鶴	按摩	時八	植木屋 藤助		中年の仲居 お仙	
会社員	十三男	会社員	円蝶	辻車夫 甚七		車夫 芳村	
工夫	一満	工夫	時丸	放浪者 熊本文吉		遊芸人 甲、乙	
あんこ仲仕	蝶笑	あんこ仲仕	蝶笑	旅商人 某		遊芸人 四、五人(甲、乙を含むか)	
出前持の男	二三郎	出前持の男	五六	自転車に乗った男		勤め婦り人 (上下より通行)	
女かみゆい	鶴の丸	女かみゆい	和蝶	其他往来の人々 数名		六十七、八のヨボヨボ爺さん 又造	
使戻りの下女	時栄	使戻りの下女	二三松	夕刊売		職員 橋本定七	
夕刊売	なたね	夕刊売	なたね	女かみゆい		熊本文七	
兵卒	太摩三	兵卒	蝶太郎	兵卒		お作の娘 おけい	
女学生	胡蝶	女学生	紫蝶	使戻りの下女			
店員	蝶次郎	店員	登久蝶	あんこ稼ぎの男			
会社員	十一	女給	紅蝶	工夫			
女給	紫蝶	仲居	五満女	会社員			
仲居	時和	老婆	蝶寿	按摩			
老婆	蝶寿	女工	蝶幸	出前持の男			
女工	富士丸	大学生	末蝶				
大学生	勢蝶	大工	時松				
大工	蝶松	自転車に乗った男	二三丸				
自転車に乗った男	二三丸	植木屋藤助	五楽				
植木屋藤助	五楽	田舎者某	小次郎				
田舎者某	三郎	放浪者熊本文吉	勢蝶				
放浪者 熊本文吉	十五	作兵衛嬢お町	蝶六				
作兵衛嬢お町	蝶六						

公演の時期によって主役の商う屋台が変わっていることが一見してわかる。〔表1〕と合わせて比較すると、昭和3年3月新橋演舞場公演の舞台は「或る雪解のガード下」で五郎は「しる屋 阿部作兵衛」であり、具体的な地名が出ていないことと主役の性別を除くと、訂正脚本と同じ設定である。次に昭和6年6月、帝国劇場公演での五郎の役は「ひやし⁽¹⁷⁾雨屋阿部作兵衛」になっており、特定の地名の有無以外は、翌月発行の全集とほぼ同じである。

つまり、五郎の声が不調になるはるか前から、公演時期に合わせて作品の季節を変え、それに伴って屋台で扱う品も「かすじる」「しる」や「冷し飴」に変えていたといえる。全集も、刊行時期が冬であれば「かすじる屋」「しる屋」になっていたであろう。

一方、3年と6年とでは季節や地名、屋台等の設定は変わっても、登場人物は一人（会社員）を除いて皆同じであることから、作品の内容は全集とほぼ同じであったと考えられる。実際、〔表1〕に示した昭和3年3月公演時の『十五年の足跡』に引用されている、「沢山の子を持って余してゐる者」（辻車夫の甚七）と「子がなくて淋しがつてゐる者」（植木屋の藤助）との「身上話からだんだん本題に入る段取」は、全集と一致している。二人が作兵衛の屋台で話していたところ、作兵衛には5年前に家出したきり音信不通の息子がおり、気に病んでいることがわかる、という展開である。⁽¹⁷⁾

しかし、訂正脚本の登場人物は大きく異なり、主役が作兵衛からお作になったことから「作兵衛嬢お町」は「お作の娘おけい」に変わる。また、全集では導入部分の重要な登場人物だった「植木屋藤助」がいなくなり、代わってお仙という中年の仲居とヨボヨボ爺さんの又造が加えられている。また、車夫の名前が甚七から芳村に変わり、物語における役割も変わっている。これらの変更は本題への導入部分に反映されており、老人又造が若者（若労働者）の足を踏んでしまったことから一悶着起き、お仙と芳村が間に入って若者が立ち去った後、屋台の主お作には3年前に「極道して家を出」た息子がおり、先ほどの若者と「顔も気質も物の云いようまで同じ」「息子のことを忘れた日はおまへん」と嘆く、という流れである。

さらに、主役が舞台に現れるタイミングも大幅に変えられている。全集では幕が開いた時から主役の作兵衛が舞台にいるが、訂正脚本では開幕時にお作の姿は見え、原稿の7枚めでようやく登場する。いずれも五郎の演技時間を短くし、のどの負担を軽減するための工夫であろう。

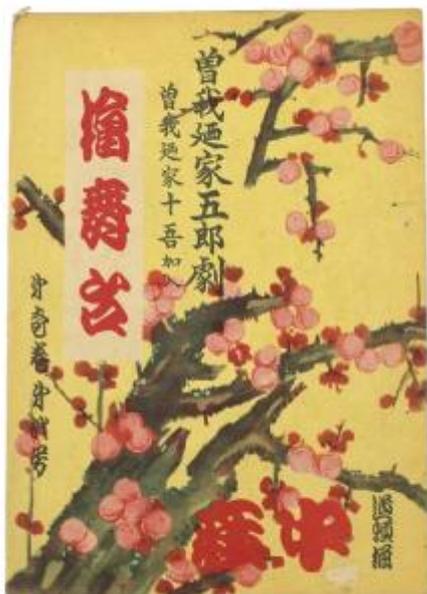
では、主役の性別はどうか。〔表1〕で示した『十五年の足跡』に紹介されている昭和13年10月公演の評によると、病気で休演した五郎に代わって女形の大磯が演じるにあたり、「婆さんに直し」という。ということは、それまでは『蔭日向』の主役は五郎が「爺さん」で演じていたといえる。しかし、トレードマークだったダミ声を失いつつある五郎には「爺さん」として台詞を言うのはのどの負担が大きかった可能性もあり、13年の大磯が「相当にいゝ出来」だったことが、10年後に脚本を改訂するにあたって性別を変えた理由のひとつかもしれない。

このように、訂正脚本では、従来どおりの季節に合わせた設定変更に加え、主役を「爺さん」から「婆さん」にし、登場人物も変えて導入部分を変えることで、台詞だけでなく五郎が舞台に立つ時間をも減らしていた。だが、前掲の文七の解説によれば、これだけの改訂をおこなっても当時の五郎の体調では厳しいものであったと思われる。

最後に、訂正脚本が書かれた翌月、昭和23年2月の中座公演の絵本から、『蔭日向』の部分を紹介する〔図4〕。舞台は訂正脚本と同じ「今池の高架線ガード下附近」で、登場人物もほぼ全て合致している（十吾の写真の役名が異なるのは誤植か）。御園座での配役もおそらく同じだったであろう。

以上のことから、訂正脚本『蔭日向』は昭和23年1月の御園座公演に向けて改訂されたものであるが、翌月の中座公演もこの脚本に基づいて演じられたといえる。五郎は3月の手術後、休養期間を経て9月に中座に復帰する。“無声の俳優、となった五郎の影の声を五郎八や泉虎などが勤めるという方法で舞台に立つが⁽¹⁸⁾、『蔭日向』の再演はなかった。「此の蔭日向はまだ多少でも声が出た時のもの」という文七の言葉どおり、この訂正脚本は、五郎が自らの声で演じることが

できた最後の『蔭日向』の脚本である。今回は紙数の都合でかなわないが、いずれ全文を紹介したいと考えている。



〔図4〕「桧舞台」第1巻第2号（資料コード 00312363）
（協力：松竹株式会社、西海穰治氏）
左：表紙、下：『蔭日向』部分拡大



【註】

(1) 曾我廻家五郎「喜劇一代男」（『日本の芸談』第5巻「新派・新国劇・喜劇」所収）、昭和53（1978）、九芸出版、p.233

五郎と親交のあった長谷川幸延の『笑い泣き人生』（昭和45（1970）、東京文芸社、p.409-413）にも同様の記述がある。ここでは、声の不調になった時期について「終戦が近づくころ、だんだん声が低くなって行くような気がした」としている。

(2) 十吾の読み方については、元京都日出新聞の演芸記者で十吾と20年ほどの付き合いのあった菱田正男氏（昭和28（1953）年当時は関西芸能倶楽部）が、十吾の後援誌に寄せた「曾我廻家十吾さん」で次のように書いている。

戦争までは十吾を「トーゴ」と称⁽⁷⁷⁾んでみたが戦争に入ってから「銃後の奉公、——といふことがやかましくいはれ出したので十吾をジューゴとふり仮名をつけてみたり、しやれた思ひつきを見せた。客は笑はせてさへくれればいゝのだからトーゴでもジューゴでもかまないし、トーゴとジューゴと両方呼ばれてみたが終戦と共にどちらになつたかまだハツキリ聞いてゐない。本人はおそらく、どちらでもいゝ、お客を笑はせたらいゝと考へてゐることだらう。（高田馨編『曾我廻家十吾』所収、十吾後援会、昭和29（1954）、p.10-11）

本稿では、倉田喜弘・藤波隆之編『日本芸能人名事典』（三省堂、平成7（1995）年）に

従い「とうご」と読む。

- (3) 新生松竹新喜劇文芸部・松竹関西演劇部編、白井信彦監修『喜劇百年 曾我廼家劇から松竹新喜劇』松竹株式会社関西演劇部、平成 16 (2004) 年、p. 9-11
- (4) 三田純市『上方喜劇 鶴家団十郎から藤山寛美まで』、白水社、平成 5 (1993) 年、p. 141-183「上方喜劇史を生きて—曾我廼家十吾の生涯」
三田純市氏は道頓堀の芝居茶屋に生まれ、「十吾さんには子供のころから可愛がられ、芝居が休みのとき、家庭劇の座員一同で出掛けるピクニックなどにも誘われた」(同 p. 246)ほど親交が深かった。昭和 56 (1981) 年 10 月に松竹新喜劇で舞台化した「喜劇伝説曾我廼家十吾」の作者でもある。
- (5) 同 p. 145
- (6) (3) に同じ、p. 11
- (7) 山口広一「明治以降の大阪劇壇」(『大阪の芸能』(毎日放送文化双書 11) 所収)、毎日放送、昭和 48 (1973) 年、p. 101
- (8) 三田純市『道頓堀 川・橋・芝居』、白川書院、昭和 50 (1975) 年、p. 169
- (9) 大槻茂『喜劇の帝王 渋谷天外伝』、小学館、平成 11 (1999) 年、p. 32 - 33
- (10) 同 p. 68
- (11) 同 p. 32 大槻氏は『大阪春秋』第 99 号「松竹新喜劇の歩み」p. 47 でも「昭和二十三年十一月、松竹は松竹新喜劇を結成する。五郎劇から曾我廼家大磯、秀蝶、明蝶、五郎八、家庭劇から十吾、高須文七、すいと・ほ一むから天外、千栄子、石川薫、宇治川美智子、長谷川稔、寛美らが参加した。五郎劇の座員が入ったため、女優と女形を併用するという変則的な芝居になった。」とし、十吾の次に文七の名を挙げている。
- (12) 同 p. 36 本名については、当館所蔵の昭和 51 (1976) 年 1 月現在の「松竹新喜劇 住所録」(資料コード 00270702) でも確認できる。なお、この住所録では文七は「文芸部」ではなく「美術部」になっており、現に『蔭日向』を含む道具帳*が 700 点近く遺されている。
(*「道具の一覧表のことではなく舞台装置の図面のことを指す。装置を作るために書かれた設計図といってよい。平面図、立体図、部分図から出来ている」中田昌秀『笑解現代楽屋ことば』湯川書房、昭和 53 (1978) 年、p. 136)
- (13) 同 p. 73 - 74
- (14) 和田久一(曾我廼家五郎の本名)『曾我廼家五郎全集』第 8 巻、アルス、昭和 6 (1931) 年、p. 3 - 5
- (15) 『松竹百年史 演劇資料』、松竹、平成 8 (1996) 年
- (16) 歌舞伎学会編『歌舞伎 研究と批評』、歌舞伎学会、平成 21 (2009) - 平成 28 (2016) 年
- (17) (14) に同じ、p. 8 - 12
- (18) (8) に同じ、p. 156

別表：曾我廻家十吾（茂林寺文福）の台本

作品名	作者	種類	時期	用紙	備考	資料コード
1 母の知恵	茂林寺 文福／作	印刷物	大正13(1924) 頃か	縦罫・原稿用紙 堀文芸部		00267443
2 役者と旦那	茂林寺 文福／作	印刷物	大正13(1924) 頃か	縦罫・原稿用紙 堀文芸部		00267534
3 アットン婆さん	茂林寺 文福、館 直志／合作	印刷物	昭和18(1943) 1.25	縦罫・原稿用紙 松竹株式会社	時期は兵庫県検閲印による	00267187
4 蔭日向	[曾我廻家] 十吾／ 改訂	直筆原稿	昭和23(1948) 1			00267344
5 燈台もと暗し	茂林寺 文福／作 星 四郎／脚色	印刷物	昭和28(1953) 6.14	(罫線なし)	大阪中央放送局台本 舞台中継	00474809
6 燃え残りのコークス	茂林寺 文福／作	印刷物	昭和30(1955) 1.5		NHK-TV台本 舞台中継	00267492
7 箱詰の幽霊	茂林寺 文福／作 松関 由紀夫／脚色	印刷物	昭和42(1967) 6	(罫線なし 製本)	中座 手書きの台本2枚挟み込み	00267385
8 箱詰の幽霊	茂林寺 文福／作 松関 由紀夫／脚色 平戸 敬二／補	印刷物	昭和47(1972) 7	(罫線なし 製本)	東京 新橋演舞場	00267393
9 喧嘩の横取	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 堀文芸部		00474692
10 門附婆さん	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹興行株式会社		00474866
11 破れ三味線	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹興行株式会社	貼紙多	00267542
12 玉子	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹興行株式会社		00267328
13 喧嘩賣買	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹土地建物興業株式会社		00474858
14 地蔵盆	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹土地建物興業株式会社		00267286
15 あひるの玉子	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹土地建物興業株式会社		00267195
16 物干の出来事	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙		00474841
17 夕刊売婆さんの手記	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙		00267963
18 瘤	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙		00267294
19 えくぼ	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙		00267278
20 新喜劇 愈々紛糾	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙		00267252
21 芸の屋根(表紙) 喜劇 移り気(中表紙)	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	(罫線なし)		00474940
22 ハッピーとズボン	茂林寺 文福／作	印刷物	不明	(罫線なし)		00267450
23 危い拾い物	茂林寺 文福／作 高須 文七／脚色	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹興業株式会社		00474379
24 若旦那の恋	茂林寺 文福／作 高須 文七／脚色	印刷物	不明	縦罫・原稿用紙 松竹土地建物興業株式会社		00267955
25 二階の奥様	茂林寺 文福／作 高須 文七／脚色	印刷物	不明	(罫線なし)	表紙に松竹株式会社大阪支 店演劇製作室の印	00267369
26 二階の奥様	茂林寺 文福／作 高須 文七／脚色	印刷物	不明	(罫線なし)		00267351
27 小判掘出し話 訂正本	茂林寺 文福／作 高須 文七／脚色	印刷物	不明	(罫線なし 製本)		00267427
28 下積の石	松島 誠二郎／作 茂林寺 文福／脚色	印刷物	不明	(罫線なし)		00267476

上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経緯】

- 平成 元年 3月 故砂川捨丸氏の遺族から、氏が愛用された貴重な鼓を大阪府に寄贈
- 平成 2年 1月 貴重な資料の散逸を防ぎ、大阪が誇る文化遺産である「上方演芸の歴史」とともに後世に残していく必要があるとして、「上方演芸保存振興検討委員会」（会長：井上 宏 関西大学教授）を設置
- 平成 4年 3月 同委員会において「上方演芸保存振興事業基本構想」を取りまとめ、資料館の設置を提言
- 平成 5年 12月 大阪府において、資料館の立地場所を大阪府中央区難波千日前に決定
- 平成 6年 7月 基本構想を受け、大阪府において資料館に関する基本計画を策定
- 平成 8年 3月 大阪府立上方演芸資料館条例を公布
- 同 年 8月 3,000 を上回る一般公募の中から資料館の愛称が「ワッハ上方」に決定
- 同 年 11月 展示室、演芸ホール、演芸サロン・資料室、レッスルルームや収蔵庫等から構成される有料施設として、大阪府立上方演芸資料館がオープン
- 平成 20年 2月 大阪府が「財政非常事態」を宣言し、全ての事業、出資法人及び公の施設をゼロベースで見直すこととし、資料館もその対象となる
- 平成 21年 12月 「大阪府戦略本部会議」において、「資料館が今後も果たすべき役割は、資料の収集・保存、資料の活用（展示・ライブラリー）、レファレンスサービスであり、「公演」「育成」は民に委ねる」との方針を決定
- 平成 22年 12月 演芸ホールを廃止
- 平成 25年 1月 「大阪府戦略本部会議」において、「当面は、現地において、常設展示を縮小し、より効率的な運営を行い、無料での利用に供するとともに、巡回展示や大学との連携等による研究機能の充実など新たな展開を図る」との方針を決定
- 同 年 4月 展示室・レッスルルームを廃止するとともに、入館を無料とする
- 平成 26年 7月 「大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会」が、資料館の今後の方向性について、「大阪独自の文化である上方演芸を後世に伝えていくことは大阪府の文化行政が担うべき役割の一つであり、現時点では、資料館がその仕事を果たすことが望ましい」と提言
- 平成 27年 4月 提言を踏まえ、資料の整理・活用を継続的かつ計画的に取り組めるよう、指定管理者による運営を改め、大阪府の直営による運営を開始
- 平成 30年 12月 多くの府民や観光客等が上方演芸に触れ、楽しみながら、その魅力を知ることができる「体験型」の事業を中心に企画・運営を実施するという方針に基づき、リニューアル工事に着手
- 平成 31年 4月 リニューアルオープン

【機能の推移】

場所	開館～		平成 23 年 4 月～ (縮小)		平成 25 年 4 月～ (縮小・無料化)		平成 31 年 4 月～ (全面リニューアル)	
	区分	面積(m ²)	区分	面積(m ²)	区分	面積(m ²)	区分	面積(m ²)
4 階	展示室	1,170.991	存置	同左	廃止 ※ ¹			
	演芸ライブラリー	150.0 (15 ブース)						
	小演芸場 [上方亭] (有料)	98.44 (74 席)						
5 階	演芸ホール (有料)	1,484.34	廃止 ※ ²					
6 階	事務室	326.705	存置	同左	廃止			
7 階	レッスンルーム (有料)	99.85 (60 席)	存置	同左	(改修) ※ ³	同左	(改修) 常設展示エリア・ 視聴ブース (5 ブース)	99.500
	収蔵庫	260.00			存置	同左	(改修) 企画展示エリア・ 演芸ステージ・ 体験エリア・ エンディング通路 (事務室含む)	305.750
	共用部分	250.093			存置	同左	(改修)	204.693
	合計	3,591.979		2,107.639		609.943		609.943

※¹ ライブラリーは、9 ブースに縮小のうえ 7 階へ移設

※² 平成 22 年 12 月に演芸ホールを廃止

※³ レッスンルーム(有料)を廃止のうえ、ライブラリー(9 ブース)及び事務室に改修

【管理運営】

期 間	管 理 運 営	備 考
開 館 ～平成 14 年 3 月	(財)大阪府文化振興財団	管理運営委託
平成 14 年 4 月～平成 18 年 3 月	大 阪 府	直営
平成 18 年 4 月～平成 22 年 12 月	(NPO) ニューウエーブ日東大阪	指定管理
平成 23 年 1 月～平成 23 年 3 月	大 阪 府	直営 (休館)
平成 23 年 4 月～平成 27 年 3 月	吉本興業グループ	指定管理
平成 27 年 4 月～	大 阪 府	直営

【歴代館長】

期 間	歴 代 館 長 名
平成 8 年 11 月 ～	粕 林 利 男
平成 11 年 4 月～	井 上 宏
平成 14 年 4 月～	有 川 寛
平成 18 年 4 月～	伊 東 雄 三
平成 23 年 1 月～	★大阪府直営<休館>
平成 23 年 4 月～	河 井 泉
平成 25 年 4 月～	井 上 明
平成 26 年 4 月～	田 中 宏 幸
平成 27 年 4 月～	★大阪府直営

大阪府立上方演芸資料館 令和元年度年報

編集・発行 大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075 大阪府中央区難波千日前 12-7
YES・NAMBAビル7階
TEL : 06-6631-0884
令和2年11月発行
